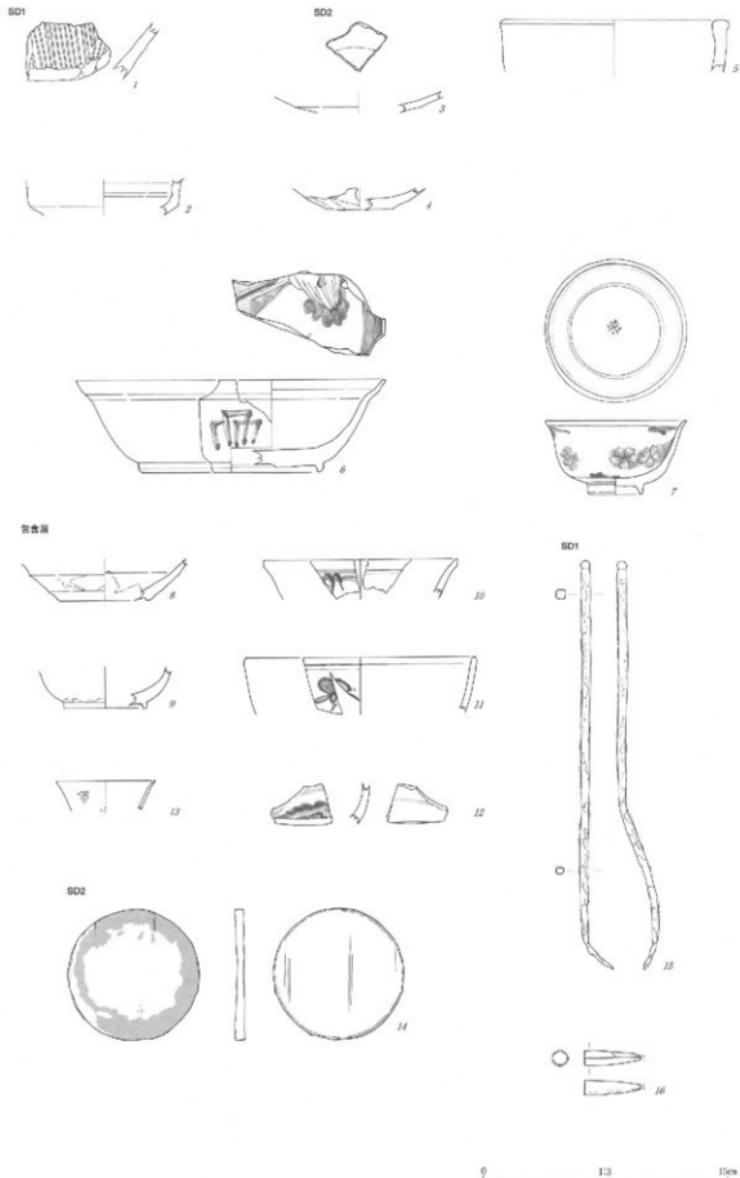


第202図 近世北陸道遺跡 遺構実測図
SD1・SD2・SD3・SD5・SD6・SX4



第203図 近世北陸道遺跡 遺物実測図 (1/3)

SD1 (1・2・15) SD2 (3~7・14) 包含層 (8~13・16)

第VI章 考 察

1 岩坪岡田島遺跡の縄文時代

-富山県における縄文時代前期のあり方-

(1) はじめに

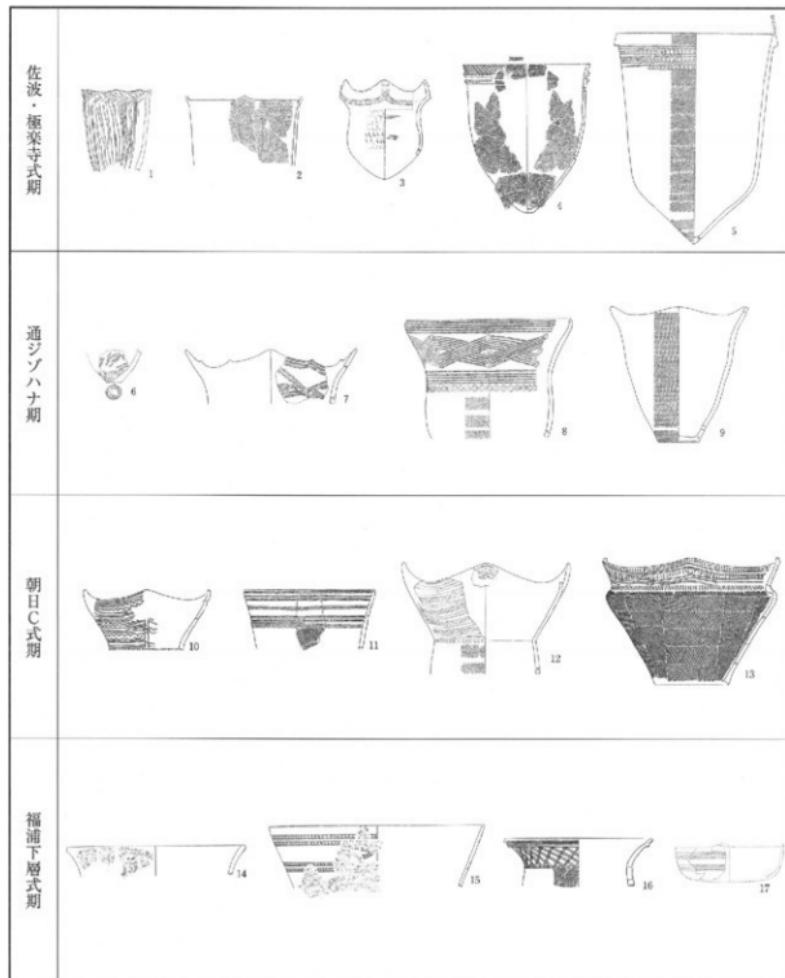
岩坪岡田島遺跡のC6・7地区では、縄文前期の土器が古代～中世遺構面の1m以上も下から面として広がって出土した。これまでの調査では、縄文土器片が数片見つかった程度で広がりが見られるのはこの周辺でも初めてであった。しかも、縄文時代の遺構検出面が、小矢部川によるものと見られる堆積層（粘土やビートなどの無遺物層）によって現況地形から1m以上も下から発見されたことも大きな驚きであった。このようなことからここでは、岩坪岡田島遺跡の縄文時代を富山県内の遺跡を通してその立地や分布状況について考えながら見ていきたい。ただし、ここでは、前期の遺跡の中で発掘調査等を行い、遺構・遺物包含層を問わず土器が出土した52遺跡を対象とする。

(2) 研究史

富山県の縄文時代前期の研究は、学史上でも有名な柴田常恵氏による氷見市朝日貝塚の発掘（1918年）に始まる。柴田氏らは、4枚の貝層と国内初の炉を持つ建物2棟を発掘した。また、朝日貝塚からは数多くの縄文土器が出土し、後に発掘地点から朝日C式（前期中葉）と朝日下層式（前期末葉）の標識遺跡ともなっている（小島2002）。1950～1960年代には、富山市観ヶ森貝塚・小竹貝塚など前期の貝塚調査が行われ、土器資料が増加した（高瀬・林1954）。なお、観ヶ森貝塚出土の土器は、観ヶ森式土器として前期後葉の標識となっている。小島俊彰氏は、これらの資料をまとめ、石川県の研究とも合わせながら県内の土器編年整備を行った（小島1968）。1970年代には、立山町吉峰遺跡の発掘調査が行われ、前期中葉～後葉の堅穴建物からなる集落が発見された。橋本正氏は、小竹貝塚や吉峰遺跡の土器などから前期の上器編年を整理した（橋本1972）。1980年代には、射水市小泉遺跡の発掘調査が行われ、遺構は検出できなかったが前期中葉と後葉の土器が多く出土した（高橋1982）。越坂一也氏は、これらの土器を整理し、これまでほっきりしていなかった前期中葉～後葉の土器編年を明らかにした（越坂1983）。山本正敏氏は、射水市南太閤山I遺跡を調査し、これまで出土例が少なかった早期末～前期前葉の土器群を整理し、他地域との併行関係を明らかにした（山本1986）。1990年代には、南砺市うづら山遺跡（往蔵1991）・高岡市上野A遺跡（久々1992）などで前期後葉の堅穴建物を伴う集落を検出し、これまでの研究を補強するような土器が出土した。2000年代には、上市町極楽寺遺跡の発掘調査が行われ、堅穴建物から前期末葉の土器がまとまって出土した（高慶2004）。最近の研究では、山本正敏氏による土器編年（山本2000）と堀沢祐一氏による堅穴建物の研究が行われている（堀沢2003）。

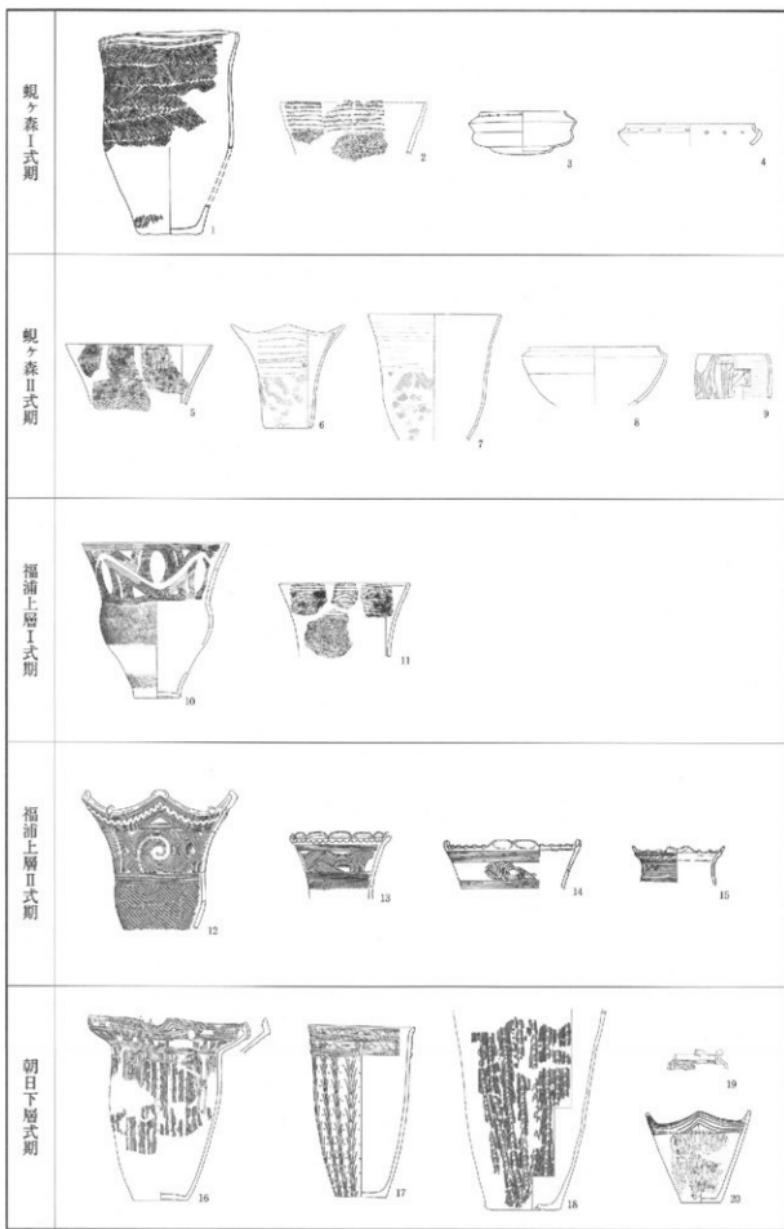
(3) 時期区分と年代（第204・205図）

前期の時期区分は、研究者によって若干の相違があるが、石川県真駒遺跡（高橋1986）や加藤三千雄氏（加藤1997・1998）や山本正敏氏らの研究を基準とし、ここでは以下の5期とする。



第204図 縄文時代早期末～前期中葉の土器変遷 (1/10)

1：上久津呂中屋、2・4：布尻、3・5・7～9・12：南太閤山I、6・11：針原西
10・13：小泉、14・15・17：吉峰、16：増山



第205図 縄文時代前期後葉～末葉の土器変遷 (1/10)

1 : 丸山B, 2・4・5・11 : 上野A, 3 : 流国No19, 6~9・18・19 : 岩坪岡田島
10 : 安田古宮, 12・13 : 小泉, 14 : 上野, 15 : 吉峰, 16・20 : 楠葉寺, 17 : 朝日貝塚

早期末～前期初頭は、石川県の佐波式、富山県の極楽寺式土器を指標とする時期で、神之木台式～花積下層式とほぼ併行する。土器の特徴は、波状または平縁の口縁、やや張った胴部、尖底・丸底・平底で器面には羽状縄文または条痕を施す。文様は、縷杉文・貝殻腹縁文・刺突文・突蒂文など多種ある。暦年代は、石川県七尾市三引遺跡出土佐波式土器付着炭化物の年代（山本・小田2001）から¹⁴C年代が 6205 ± 123 B P・ 6289 ± 101 B Pで曆年較正すると B C 5310–4990となる。

県内のこの時期の遺跡には、標識遺跡である極楽寺遺跡、山本正敏氏が土器編年案を示した南太閤山 I 遺跡、鹹水貝塚である上久津呂中屋遺跡など15遺跡がある。遺構は、土坑や貝塚や谷などで少なく、遺物包含層から出土することが多く、建物は見つかっていない。

前期前葉は、型式名はまだついていないが石川県の通ジゾハナ遺跡や富山県の南太閤山 Z II 期の土器を指標とする時期で、ニツ木式～閑山式にはほぼ併行する。遺跡数は、非常に少ない。上器の特徴は、全体の解る資料が少ないが、平縁に平底で羽状縄文を施す。文様は、口縁に刺突・沈線による区画文、底面に爪形の刺突文を施す程度で文様の種類は少ない。

県内のこの時期の遺跡は、型式名が決まっていないように数少なく、今のところ南太閤山 I 遺跡・十二町潟排水機場遺跡・加納谷内遺跡・上久津呂中屋遺跡の4遺跡である。遺構は、加納谷内遺跡で土坑があるぐらいで他は遺物包含層が主体となる。

前期中葉は、朝日 C 式、これに後続する福浦下層式を指標とする時期で、黒浜式～諸磯 a 式とほぼ併行する。朝日 C 式は、ラッパ状の口縁や肩の張った器形で、羽状縄文を施す。文様は、口縁部に連続爪形文（C 字状）、刺突文・コンバス文を施す。福浦下層式は、内湾や外反に聞く口縁部に羽状縄文を施す体部がつく。文様は、口縁に爪形文・刺突文・格子目文・沈線文を施す。暦年代は、石川県野々江遺跡出土福浦下層式土器付着炭化物の年代（山本・小田2001）から¹⁴C年代が 5383 ± 116 B Pで曆年較正すると B C 4490–3970となる。

県内のこの時期の遺跡は、堅穴建物を検出した吉峰遺跡、標識遺跡になっている朝日貝塚などがある。遺構は、吉峰遺跡以外は土坑程度で遺物包含層が主体である。なお、吉峰遺跡は10棟の堅穴建物と土坑群からなる集落で、県内で本格的に集落を営むようになった開始時期と言えよう。

前期後葉は、蜆ヶ森 I 式・蜆ヶ森 II 式を指標とする時期で、前者が諸磯 b 式、後者が諸磯 c 式と併行する。土器の特徴は、平縁または波状の口縁に平行する隆起線文を数条施し、体部に羽状縄文または斜縄文を施す。I 式と II 式との違いは、口縁部の隆起線文で、前者が粘土を貼り付けて隆起線とするに対し後者は器面を指でつまみ出す程度の微隆起線となる。暦年代は、岩坪岡田島遺跡出土蜆ヶ森 II 式土器出土遺構炭化物の年代から¹⁴C年代が 4900 ± 40 B Pで曆年較正すると B C 3770–3630となる¹³⁷。

県内のこの時期の遺跡は、標識遺跡である蜆ヶ森貝塚、堅穴建物を検出した丸山 B 遺跡・上野 A 遺跡・うずら山遺跡、そして岩坪岡田島遺跡などがある。遺構は、堅穴建物や土坑など多くの遺跡で見られるようになり、1 遺跡当たりの建物の数は少ないが、各地で小さな集落が見られるようになる。

前期末葉は、福浦上層 I 式・福浦上層 II 式・朝日下層式を指標とする時期で、十三菩提式とほぼ併行する。福浦上層式は、外反する口縁に丸みを持つまたは円筒状の体部がつく。I 式と II 式との違いは、文様で前者が陽刻の鋸歯状文と結節状浮線文で後者が印刻で鋸歯状文と半隆起線文となる。朝日下層式は、外反する口縁部が上端で内湾し円筒状の体部がつくものとやや外反する口縁に円筒状の体部がつくものがあり、体部には木目状撚糸文や斜縄文を施す。文様は、ソーメン状の粘土紐によるものと縦条体を押し当てるものなどがある。なお、真脇式については異論があり、ここでは福浦上層 II

¹³⁷ 第二分編 自然科学分册 佐武会社施設研究室「手洗井水道跡・岩坪岡田島貝塚出土遺物の放射性炭素年代測定」

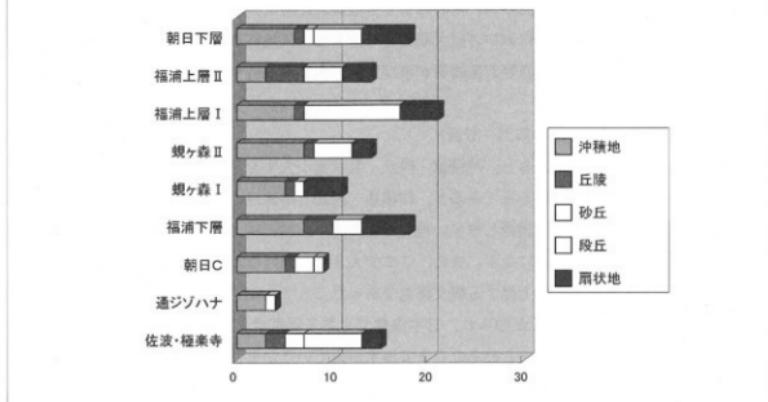


第206図 繩文時代前期の遺跡分布図

番号	遺跡名	所在地	立地		流域		遺跡の時期						遺構	
			地形分類大別	地形分類詳細	標高(m)	大羽	詳細	縄文中期		縄文後期		縄文後期		
								前段	後段	前段	後段	前段	後段	
1	円尾山遺跡	佐久市門郷	沖積地	丘陵部	5	高尾川	-		○		○	△	-	
2	岩野谷遺跡	水戸市加納	冲积地	丘陵部	7	高尾川	-		○				×	
3	朝日山遺跡	水戸市朝日丘	砂丘	丘陵部	7	高尾寺川	諏訪川	△	○					○ 縄文中期・後六葉型
4	十二町沼水熊沼遺跡	水戸市鬼塚	砂丘	丘陵部	1	高尾寺川	万羅川	-	△	○				-
5	上久津瀬中瀬遺跡	水戸市ト久津瀬	沖積地	丘陵部	3	高尾寺川	万羅川	○	○	△	○	△	△	○ 縄文中期・後六葉型
6	云坪山島遺跡	高根市岩瀬	沖積地	丘陵部	9-14	高根川	-				○			○ 小切路
7	上野山遺跡	高根市知内町上野	丘陵	冲积地	27	小野川	-	△	△	△	○	○		○ 小切路・台形
8	坂町遺跡	小山市坂町	冲積地	丘陵部	30-32	大久保川	子田川	○	○	△	△	△	△	△
9	城山土塁跡	小山市坂町	砂丘	丘陵部	40-42	小野川	流松川	-						-
10	田谷村越跡	小山市谷口	冲積地	丘陵部	68-75	小野川	流松川	-						-
11	下野山遺跡	西磐井郡向賀町	冲積地	丘陵部	39	小野川	大井川	-						△ 六葉型・穴
12	伴明八幡遺跡	南牧市佐原町上野	冲積地	丘陵部	170-178	小野川	-							△ 大切路
13	安森北北島遺跡	那珂市若狭	冲積地	丘陵部	80	高尾川	和田川	-						-
14	武沢山土塁跡	那珂市若狭	冲積地	丘陵部	54	高尾川	和田川	-						-
15	神山遺跡	那珂市増山	砂丘	丘陵部	47-50	高尾川	和田川	-						-
16	丸澤山島遺跡	西磐井郡向賀町下丸澤	冲積地	丘陵部	420	高尾川	利賀川	-						-
17	小畠山遺跡	財前市利賀村小畠	冲積地	丘陵部	12	利賀川	-							-
18	那珂川北遺跡	財前市南郷町	冲積地	丘陵部	10	利賀川	和田川	-						-
19	西印山遺跡	財前市青井谷	冲積地	丘陵部	17-20	下条川	-				○	○		△-○
20	上野山遺跡	財前市上野	冲積地	丘陵部	30	下条川	-	△					△	-
21	赤木大山山遺跡	財前市赤木山	冲積地	丘陵部	9	下条川	-	○	○	○	○	○		△
22	西山遺跡	財前市木山	冲積地	丘陵部	17-20	下条川	-							△-○
23	引佐山土塁跡	財前市木戸	冲積地	丘陵部	3	新潟川	-	△	△					○ 洗木屋跡-洗路
24	鶴山山遺跡	那珂市八幡町鶴山	冲積地	丘陵部	172	神津川	那珂川	-						△-○ 洗木屋跡-十花
25	長山遺跡	那珂市八幡町鶴山	冲積地	丘陵部	100	神津川	-							-
26	平岡遺跡	那珂市平岡	冲積地	丘陵部	62	新潟川	利賀川	-						-
27	北河内島-島遺跡	亘山西北川	冲積地	丘陵部	70-72	新潟川	利賀川	-						△-○
28	北洋山遺跡	亘山西北川	冲積地	丘陵部	30	新潟川	利賀川	-						-
29	六沢山遺跡	亘山西北川	冲積地	丘陵部	26-28	新潟川	-							△-○ 洗木屋跡-十花
30	鷺山遺跡	亘山西北川	冲積地	丘陵部	26-30	新潟川	-							-
31	小竹山遺跡	那珂市鈴鹿町	冲積地	丘陵部	4	新潟川	新潟川	△	△	○	○	△	△	△ 土坑
32	幌ヶ原古墳	亘山西北	冲積地	丘陵部	4	新潟川	新潟川	-						○ 洗木屋跡
33	須賀山遺跡	亘山西北	冲積地	丘陵部	110	上条川	-							△-○ 洗木屋跡
34	右尻山遺跡	亘山西北	冲積地	丘陵部	150	新潟川	-							-
35	金剛山遺跡	亘山西北	冲積地	丘陵部	27	内宿川	那珂川	-						-
36	押出山遺跡	亘山西北	冲積地	丘陵部	90-100	内宿川	那珂川	○	○	△	△	△	△	△
37	辻山山遺跡	亘山西北	冲積地	丘陵部	33	白石川	那珂川	-						-
38	丸山山遺跡	上野町丸山	冲積地	中谷部	90-91	上条川	-							△-○ 洗木屋跡-十花-連
39	佐東山遺跡	上野町佐東寺	冲積地	中谷部	110	上条川	-							○ 堆土遺跡-穴-火
40	古越山遺跡	山形町下田	冲積地	中谷部	213	内宿川	新潟川	○	○	△	○	○	○	○ 洗木屋跡-土坑
41	天ノ山遺跡	山形町天ノ山寺	冲積地	丘陵部	260	新潟川	-							-
42	火持山遺跡	亘山西北	冲積地	丘陵部	292	新潟川	新潟川	-						-
43	野口山遺跡	亘山西北	冲積地	丘陵部	400	雪野川	-							-
44	吉原山遺跡	亘山西北	冲積地	丘陵部	395	雪野川	-							-
45	古岡山古墳群	山形町二寺	冲積地	丘陵部	400	雪野川	-							-
46	牛江遺跡	勝川市牛江	冲積地	丘陵部	25	上条川	利賀川	-						-
47	安田山古墳群	勝川市安田	冲積地	中谷部	43	上条川	利賀川	-						△ 土坑
48	佐野山遺跡	佐野町佐野	冲積地	丘陵部	5	利賀川	-							-
49	野尻山遺跡	利根町野尻	冲積地	丘陵部	10-20	利賀川	-							-
50	馬場山山遺跡	利根町馬場	冲積地	丘陵部	20-35	大利賀川	-							-
51	猪崎山山遺跡	利根町猪崎	冲積地	丘陵部	19-30	大利賀川	-							△ 火
52	猪崎山山遺跡	利根町猪崎	冲積地	丘陵部	19-30	大利賀川	-							○ 火
53	猪崎山山遺跡	利根町猪崎	冲積地	丘陵部	20-35	大利賀川	-							-
54	猪崎山山遺跡	利根町猪崎	冲積地	丘陵部	19-30	大利賀川	-							△ 火

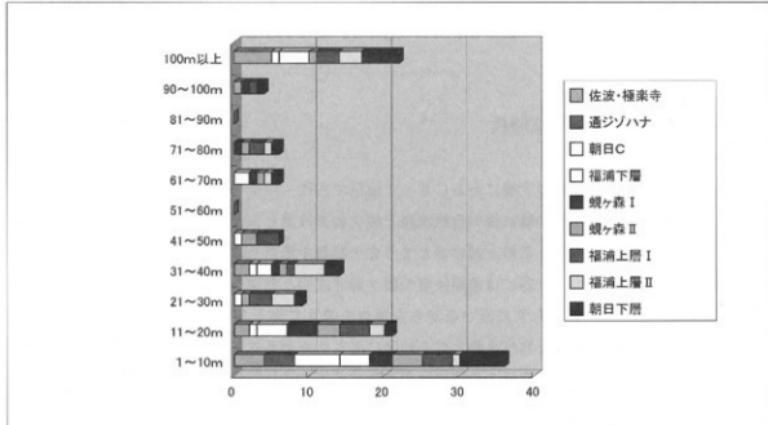
第35表 富山県の縄文時代前期遺跡一覧

	佐波・極楽寺	通ジノハナ	朝日C	福浦下層	規ヶ森I	規ヶ森II	福浦上層I	福浦上層II	朝日下層	計
沖積地	3	3	5	7	5	7	6	3	6	45
丘陵	2	0	1	3	1	1	1	4	1	14
砂丘	2	1	2	0	0	0	0	0	1	6
段丘	6	0	1	3	1	4	10	4	5	34
畠状地	2	0	0	5	4	2	4	3	5	25
計	15	4	9	18	11	14	21	14	18	



第36表 遺跡の立地 1

海拔・標高	佐波・極楽寺	通ジノハナ	朝日C	福浦下層	規ヶ森I	規ヶ森II	福浦上層I	福浦上層II	朝日下層	計
1~10m	4	4	6	4	3	4	4	1	6	36
11~20m	2	0	1	4	4	3	4	2	1	21
21~30m	0	0	0	1	0	1	3	3	1	9
31~40m	2	0	1	2	1	1	1	4	2	14
41~50m	0	0	0	1	0	2	3	0	0	6
51~60m	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
61~70m	0	0	0	2	1	1	0	1	1	6
71~80m	0	0	0	0	1	1	2	1	1	6
81~90m	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
91~100m	1	0	0	0	1	0	1	0	1	4
100m以上	5	0	1	4	0	1	3	3	5	22
計	14	4	9	18	11	14	21	15	18	



第37表 遺跡の立地 2

式に含むものとする。曆年代は、極楽寺遺跡出土朝日下層式土器付着炭化物の年代（小林・坂本2004）から^{注28}C年代が 4770 ± 40 BP・ 4830 ± 40 BPで曆年較正するとBC3640-3520となる。

県内のこの時期の遺跡は、貝塚である朝日貝塚や小竹貝塚や針原西遺跡、竪穴建物を検出した神明原A遺跡・古沢遺跡・極楽寺遺跡・吉峰遺跡などがある。遺構は、これまでの時期よりも大きく増加し、竪穴建物を伴う集落も多く見られ、前時期よりも遺跡数が増え、大型化する集落も現れる時期である。このような傾向が、中期において巨大な集落を作り出す素地になったのであろう。特に吉峰遺跡では、前時期に一旦なくなった竪穴建物群が再び現れ、大きな集落が作られた。

(4) 遺跡の立地（第206図・第35~37表）

遺跡の分布を地形から見てみると、沖積地・段丘・扇状地が大半を占め^{注29}、各時期においてもほぼ同様となっている。地形の詳細を見てみると、沖積地・段丘・扇状地のいずれでもその端の部分に集中する。これは、ひとえに水を獲得しやすい地点と言えよう。例えば、扇状地扇端部では湧水点があるし、段丘では河川に近いことになる。また、ここで大きな要因にならうことは、この時期に全国的に気候の温暖化により海面が上昇する縄文海進であったことである。太平洋側では、関東平野の奥まで海水が流れ込んでいたことが知られ、日本海側でもある程度はこれに類していたのであろう^{注30}。日本海側では、はっきりと現在のどのあたりまで海水が来ていたかを示すものは地域ごとにはあるが全体を示すものはほとんどない。ただ、このことを物語るものとして日本海側に多く残っているまたは残っていた潟湖（ラグーン）がある。例えば、秋田県の八郎潟、新潟県の紫雲寺潟、石川県の柴山潟などである。富山県では、射水平野の放生津潟、氷見平野の十二町潟がある。これらは、縄文海進時に内陸に入り込んだ海水が縄文中期頃から引いてゆき、最終的に潟湖として残ったものである。

沖積地の遺跡を見てみると、丘陵裾部に帆ヶ森貝塚・小竹貝塚・針原西遺跡・上久津呂中屋遺跡などの貝塚がある。これらは、現在では海岸線からは離れているが、標高は4m以下と低地に位置し、海水性の貝を出土する。のことから、沖積地の多く特に4m以下は縄文海進時には海面であった可能性が高い。それは、沖積地の中央に前期の遺跡がないことからも証明されよう。

つまり、前期の立地は、沖積地・砂丘なら丘陵裾部、扇状地なら扇端部か扇頂部、河岸段丘を基本としている。更に竪穴建物などの集落を形成する遺跡は、その中でも特に丘陵上または丘陵よりの高所に位置しているようである。

(5) 岩坪岡田島遺跡の縄文時代

A 立地と遺構（第207図）

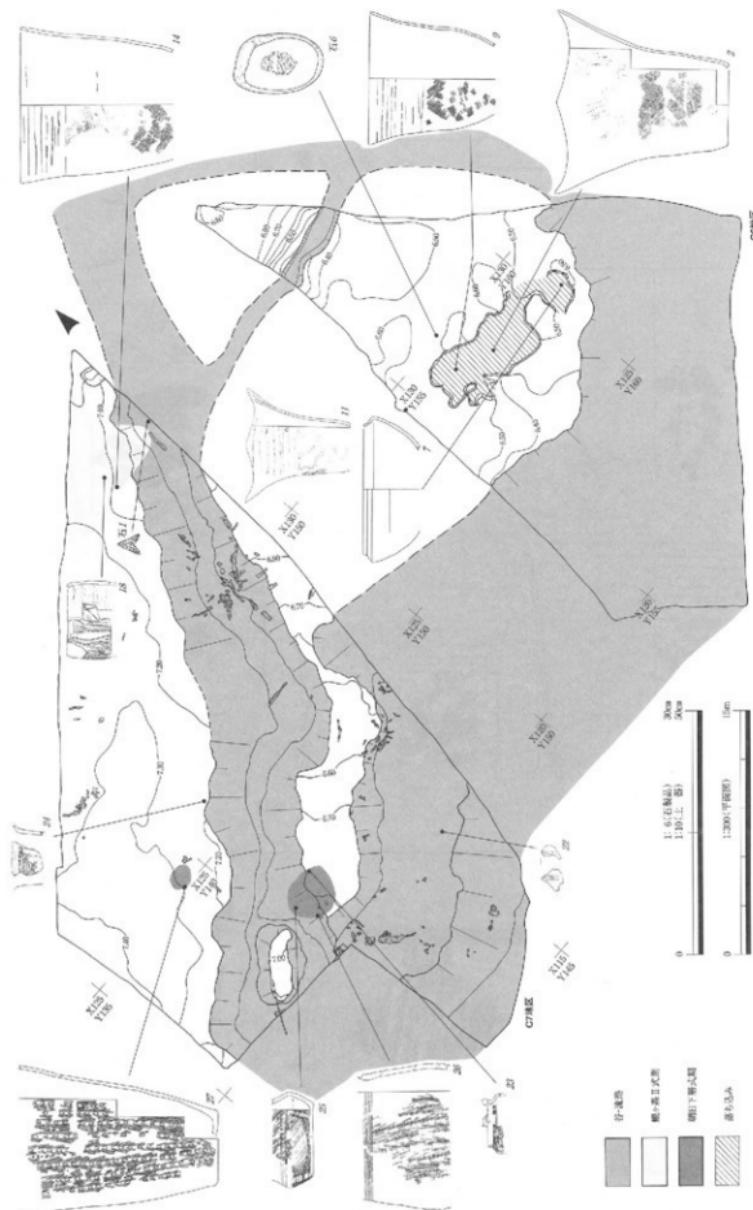
岩坪岡田島遺跡では、遺跡の北端にあるC6・7地区で古代・中世の遺構面（標高約8~9m）の1m以上下（標高6~7m）の層に浅い自然流路と縄文前期後葉と末葉の土器がいくつかのまとまりをもって出土した。本稿では、この土器のまとまりを土器集中地点と呼称し、現地調査では土器片の点上げを行った。その結果、土器には前期後葉の帆ヶ森II式期と前期末葉の朝日下層式期の2時期のものが存在し、それらは重ならずに近いながらも地点を逸えて出土していることがわかった。なお、遺構は、東側の谷に注ぐ小さな自然流路とC6地区に落ち込みがあるぐらいで建物や貯蔵穴は見られなかった。なお、C6地区の落ち込みの端には炭化物の多く含まれた穴がある。

B 遺物（第208図）

出土した遺物には、縄文土器の他に石鎌や蔽石などの石器が数点、先の尖った棒状の木製品がある

^{注28} 富山県1992『10万分の1富山市左近町地図』、「富山県地図10万分の1」の地形分類を使用した。

^{注29} 金子哲郎氏は、帆ヶ森の遺跡での地質状況から太平洋側と異なり縄文海進では恐らくなかったとする（金子1999）。





第206図 岩坪岡田島遺跡出土縄文土器

ぐらいで全体的に少ない。これは、建物をもつ集落でないためなのであろう。

土器には、先述したように観ヶ森II式期と朝日下層式期の2時期のものがあり、それ以外の時期のものはない。観ヶ森II式期の土器（1～13）は、C6地区の落ち込みの周りとC7地区の北西側にある土器集中地点を中心に出土する。土器の大半は、口縁部にユビナデによるシワ状の微隆起線文、体部に羽状縄文または斜縄文を施す深鉢で、平縁（8・11）と波状口縁（7・10）をもつものがある。この他に諸磯c式の影響を受けた破片（1～5）が出土している。1はボタン状貼付文、2は半截竹管による刺突文、3は耳朶状の貼付文をつけるものの破片である。4は、半截竹管による集合沈線文を施した鉢。5は、諸磯b式に見られる浅鉢から円列孔文が抜けたもの。このように在地の観ヶ森式土器と共に東日本の影響が窺えるものも出土している。朝日下層式期の土器（14～16）は、C7地区の南西側にある上器集中地点から出土した。土器の量及び広がりは観ヶ森II式期に比べると少ない。深鉢と小型の鉢があるが、いずれも破片で全体を窺える資料はない。土器の文様は、半隆起線や斜縄文や木目状撚糸文を施す。16は、いわゆる真脇式の形状をした深鉢の底部。朝日下層式に典型的な円筒状の体部～底部とはならないが、14・15と同様な文様からこの時期のものと言えよう。

C 環境

花粉分析では、縄文土器の出土する層（Ⅲ層）からはハンノキ属が多く検出され、これを主体とした湿地林が分布し、周辺にカヤツリグサ科やイネ科の湿生性植物が生育する湿潤な環境で、マツ属・トチノキ・クルミなどの森林があったとされる。なお、自然流路の花粉分析では、カヤツリグサ科やミズバショウ属が出ており、湿地性の環境が見られる³⁰⁰。

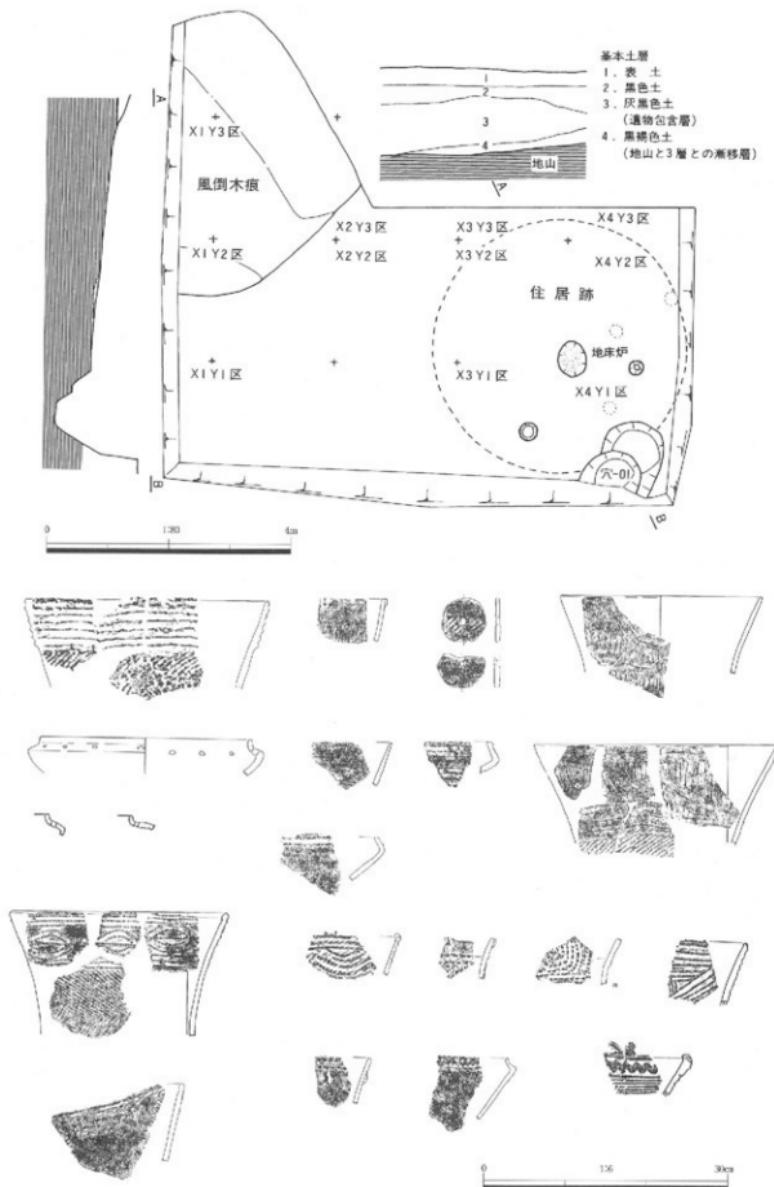
珪藻分析では、珪藻化石が非常に少なく、乾湿を繰り返す環境が考えられる。また、Ⅲ層から海水生種が少ないと検出され、海に近接するか海水の飛沫などが風によりもたらされる環境があった可能性があるという³⁰¹。このことは、縄文海進との関係を考える鍵になるかもしれない。

D 上野A遺跡との対比（第209図）

岩坪岡田島遺跡の近辺には、これと同時期の遺跡としては高岡市上野A遺跡以外にはほとんど見られない。そこでほんの時期で建物を検出した上野A遺跡との対比から岩坪岡田島遺跡を考えてみたい。

上野A遺跡は、岩坪岡田島遺跡と同様に小矢部川低地で西山丘陵の裾部に立地する。過去に2度の発掘調査が行われ、堅穴建物1棟・土坑・溝を検出し、観ヶ森II式を中心に福浦下層～新保式期までの土器や石器が出土している（久々1992・栗山2003）。遺構は、建物や土坑などは遺跡内でも高所（標高約27m）に位置し、低所では自然流路や溝などしか見つかっていない。遺構の時期は、前者が観ヶ森II式で後者がそれよりも新しい時期の福浦上層I式を中心とする。このような傾向は、北西の高所が観ヶ森II式期、南西の低所が新しい朝日下層式という岩坪岡田島遺跡でも同様に見られる。ただし、岩坪岡田島遺跡では標高が高所でも7mと低く、建物は建てられなかつたのであろう。石器は、上野A遺跡では石鏃・凹石・磨製石斧・石匙など10数点が出土する程度で数少ない。岩坪岡田島遺跡も同様に石器の数は少なく、石鏃・凹石という共通項がある。また、いずれの遺跡でも打製石斧は出土していない。次に自然遺物は、上野A遺跡では低所からオニグルミ・コナラ・ブナなどの種実が出土し、岩坪岡田島遺跡ではオニグルミのみが出土している。なお、岩坪岡田島遺跡のオニグルミには、打撲痕があり、食用後の残渣と見られている。いずれの遺跡でも落葉広葉樹が遺跡の周囲にあり、ここから食用の種実を採集していたことが窺える。

300 第二分冊 自然科学分析 株式会社立場研究研究所「1. 花粉分析 2. 岩坪岡田島遺跡 C7地盤 S D1123・佐吉町における花粉分析」
301 第二分冊 自然科学分析 株式会社立場研究研究所「3. 硅藻分析 3. 岩坪岡田島遺跡 C7地盤 S D1123・佐吉町における硅藻分析」



第209図 高岡市上野A遺跡の主な遺構と出土遺物 (久々1982・栗山2003より転載)

(6) おわりに

以上のように県内の前期の遺跡を通して岩坪岡田島遺跡を見てみた。ここで県内の遺跡の特徴をまとめてみると、早期末～前期初頭：貝塚の他には造構はほとんど見られず、定住というよりは各地を転々と移動していた時期。前期前葉：前時期よりも遺跡数・造構が少ない時期で、南太閤山Ⅰ遺跡のあり方から前時期と同様な生活をしていたものと窺える。前期中葉：吉峰遺跡にあるように竪穴建物をつくる集落の形成時期。前期後葉：上野A遺跡や丸山B遺跡にあるように各地に竪穴建物をつくる集落が広がる時期。前期末葉：吉峰遺跡に竪穴建物が10棟以上つくられ、集落が大きくなる時期で中期の大集落の前段階とも言える時期。このような集落の変遷のなかで共通していることは、その立地で沖積地・砂丘なら丘陵裾部、扇状地なら扇端部か扇頂部、段丘上を基本としている。そして竪穴建物などの集落は、丘陵または丘陵よりの高所に位置していることである。それから、前期の遺跡は埋没しているものが多いことも言える。例えば、岩坪岡田島遺跡・南太閤山Ⅰ遺跡・加納谷内遺跡では地表下1～1.5m、上久津呂中屋遺跡では地表下1～3m以上のところで前期の造構面を検出している。このようなことは、縄文海進とその後の海退（沖積地の形成）によって土砂の多量の堆積（主に無遺物層）が起きた結果であろうし、遺跡の発見を難しくしている要因となっている。つまり、前期の遺跡数が少いのは、遺跡が少ないだけではなく未発見のものがまだ多くあるものと考えられるのである。今後の調査特に沖積地では、下層の確認が必要であろう。

最後に岩坪岡田島遺跡の性格は、建物を持たず土器集中地点や落ち込みからなる遺跡で、狩猟・採集といった食料調達や調理の場であったのであろう。それは、石鐵（狩猟）やクルミ（採集）や炭化物の付着した深鉢・円石・敲石（調理）などの出土遺物から窺える。ただ、これらの遺物の出土量は少なく、造構がないということを合わせても居住をしていたとは思えない。このような遺跡のあり方は桜町遺跡にも類似している。それでは、人々の住まいはどこにあったのであろうか。現況では、近郊では上野A遺跡ぐらいしか建物は見つかっていない。しかし、ここでは今までのところ建物は1棟しか見つかっておらず、大きな集落となるかは不明である。そのため、県内の遺跡分布状況から見れば岩坪岡田島遺跡よりも高所で丘陵または丘陵裾部に未発見の遺跡があるのかもしれない。いずれにせよ岩坪岡田島遺跡は、これまで縄文時代の遺跡といえば丘陵や台地といった見方に對し、低地にも縄文前期の人々の営みを垣間見ることのできたということで縄文遺跡の立地に一石を投じるものになるであろうし、これから調査方法を考える上で重要な遺跡となるであろう。

（町田賛一）

参考文献

- 井伊浩一郎 2000『富山市北代西山遺跡発掘調査報告書』富山市教育委員会
- 飯田 勉 1981『前山Ⅱ遺跡』『富山県八尾町富山八尾中核工業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』八尾町教育委員会
- 石川ゆずは 2005『上久津呂中屋遺跡 下巣』『埋蔵文化財調査概要－平成16年度－』財團法人富山県文化振興財团埋蔵文化財調査事務所
- 石原 正敏 1993『新潟県の諸鐵式土器』『第6回縄文セミナー 前期終末の諸様相』縄文セミナーの会
- 伊藤 隆三 1993『埴生上野遺跡発掘調査概要報告』『平成4年度小矢部市埋蔵文化財発掘調査概報』小矢部市教育委員会
- 伊藤 隆三・大野 淳也 2001『桜町遺跡 調査概報』桜町遺跡発掘調査団 学生社
- 上野 寧・岡上 進一 1977『福光町神明原A遺跡』『富山県福光町・城端町立野ヶ原遺跡群 第5次緊急発掘調査概要』富山県教育委員会
- 内田亞紀子 2005『上久津呂中屋遺跡出土の縄文時代遺物』『紀要 富山考古学研究 第8号』財團法人富山県文化振興財团埋蔵文化財調査事務所
- 往賀 久雄 1991『富山県福光町 うづら山遺跡 緊急発掘調査概要』福光町教育委員会
- 岡上 進一・樺本 正春 1978『富山県砺波市宮森新北島I 遺跡緊急発掘調査概要』富山県教育委員会
- 加藤三千雄 1997『北陸における縄文時代前期末葉土器群の展開（1）』『石川考古学研究会会誌 第40号』石川考古学研究会
- 加藤三千雄 1998『北陸における縄文時代前期末葉土器群の展開（2）』『石川考古学研究会会誌 第41号』石川考古学研究会
- 加藤三千雄 1999『北陸地方 前期』『縄文時代10 縄文時代文化研究の100年 第2分冊 土器形式編年研究（2）』縄文時代文化研究会
- 金子 拓男 1999『低湿地内での遺跡の存在と縄文前期海進への疑問』『新潟県の考古学』新潟考古学会・高志書院
- 金子 直行 1999『縄文前期終末土器群の関係性』『縄文土器論集』縄文セミナーの会 六一書房
- 狩野 謙・森 秀典 1985『富山県立山町絆合公園内野沢狐塚遺跡発掘調査概報』立山町教育委員会
- 狩野 謙・山本 正敏 1987『北陸自動車道遺跡調査報告一朝日町編3 馬場山D遺跡・馬場山G遺跡・馬場山H遺跡』富山県教育委員会
- 狩野 謙 1991『北陸自動車道遺跡調査報告一朝日町編6 塙A遺跡土器編』富山県教育委員会
- 久々 忠義 1982『北陸自動車道遺跡調査報告一立山町土器・石器編一 石板助地沢遺跡・石板助地沢II遺跡・白岩古高遺跡・辻坂の上遺跡・若宮A遺跡・若宮B遺跡』富山県教育委員会
- 久々 忠義 1992『富山県福岡町上野A遺跡発掘調査概要』福岡町教育委員会
- 久々 忠義 1993『朝日町崩山ゴルフクラブ内遺跡発掘調査報告 梅木大平遺跡A地区・梅木大平遺跡B地区・崩山窯跡・官ノ東遺跡』富山県埋蔵文化財センター・朝日町教育委員会
- 栗山 雄夫 2003『富山県福岡町上野A遺跡発掘調査報告Ⅱ』福岡町教育委員会
- 黒坂 博二 1989『羽状縄文系土器様式』『縄文土器大観1 草創期・早期・前期』小学館
- 高慶 孝 1994『富山県上市町丸山B・眼目新丸山遺跡発掘調査概報』上市町教育委員会
- 高慶 孝・三浦 和惣 2004『富山県上市町施楽寺遺跡発掘調査概報』上市町教育委員会
- 越坂 一也 1983『北陸における縄文時代前期中・後葉土器の編年について』『北陸の考古学 石川考古学研究会会誌 第26号』石川考古学研究会
- 越坂 一也 1986『鏡ヶ森式期』『石川県能都町 真脇遺跡』能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団
- 小島 幸雄 1977『富山市古沢遺跡概要調査報告書』富山市教育委員会

- 小島 俊彰 1968 「北陸における純文前期末の様相」『信濃 第20巻第4号』信濃史学会
- 小島 俊彰 1974 「北陸の純文時代中期の編年」『大境 第5号』富山考古学会
- 小島 俊彰 1978 「富山県滑川市安田古宮遺跡発掘調査報告書」滑川市教育委員会
- 小島 俊彰 1979 「本江遺跡」『滑川市史 考古資料編』滑川市史編さん委員会
- 小島 俊彰 1985 「朝日貝塚の朝日下層式土器再見!」「大境 第9号」富山考古学会
- 小島 俊彰 1986 「福浦上層式期」「真脇式期」「朝日下層式期」「石川翠能都町 真脇遺跡」能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団
- 小島 俊彰 1989 「十三菩提式土器様式」『純文土器人綱1 草創期・早期・前期』小学館
- 小林 謙一・坂本 徒 2004 「富山県上市町極楽寺遺跡出土試料の¹⁴C年代測定」「富山県上市町極楽寺遺跡発掘調査概報」上市町教育委員会
- 斎藤 隆・境 洋子 2004 「B区」「針原西遺跡発掘調査報告書」富山県小杉町教育委員会
- 酒井 重洋・島田 修一 1989 「富山県八尾町長山遺跡発掘調査概要(5)」八尾町教育委員会
- 酒井 重洋・島田 修一 1989 「富山県小杉町・大門町小杉流通業務団地内遺跡群第9次緊急発掘調査概要 -No19遺跡-」富山県埋蔵文化財センター
- 勾坂 友秋・越瀬 瑞穂 2003 「富山県朝日町神田遺跡発掘調査報告書」朝日町教育委員会
- 桜井 隆夫 1979 「北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告書第1集 山田新遺跡・東山遺跡・新坂遺跡」黒部市教育委員会
- 新宅 直 2006 「加納谷内遺跡」「平成17年度 埋蔵文化財年報」財団法人富山県文化振興財团埋蔵文化財調査事務所
- 神保 孝造 1978 「増山遺跡No 6地区」「高沢鳥居遺跡」「富山県砺波市柏原町遺跡群子備調査概要」砺波市教育委員会
- 神保 孝造・島田 修一 1988 「富山県八尾町長山遺跡発掘調査概要(4)」八尾町教育委員会
- 杉山 大晉 2006 「上久津呂中層遺跡」「平成17年度 埋蔵文化財年報」財団法人富山県文化振興財团埋蔵文化財調査事務所
- 間 浩 他 1986 「No19遺跡」「富山県小杉町・大門町小杉流通業務団地内遺跡群第8次緊急発掘調査概要」富山県教育委員会
- 間根 慎二 1986 「糸井富前遺跡II」群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 間根 慎二 1995 「諸磲c式以前」「研究紀要 12」財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 間根 慎二 1999 「諸磲c式以後」「純文土器論集」純文セミナーの会 六一書房
- 高橋 重慈・林 大門 1954 「帆が森貝塚調査報告書」富山大学考古学同好会・富山県教育委員会
- 高橋 浩二・中村 大介 1993 「富山市小竹貝塚採集の遺物」「大境 第15号」富山考古学会
- 高橋 修宏 1982 「小泉遺跡」大門町教育委員会
- 高尾 勝喜 1986 「北陸の純文土器編年」「石川翠能都町 真脇遺跡」能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団
- 谷口 康治 1989 「諸磲式土器様式」「純文土器大綱1 草創期・早期・前期」小学館
- 坂田 一成 1994 「富山県小矢部市 白谷岡村遺跡」小矢部市教育委員会
- 寺崎 裕助 1993 「鍋町式土器について」「第6回純文セミナー 前期終末の諸様相」純文セミナーの会
- 中野 純 1997 「刈羽式土器の再検討—型式間交渉の分析による試論—」「新潟考古談話会会報 第17号」新潟考古談話会
- 中野 純 1998 「鍋屋式土器と福浦上層式土器の再編索引」「新潟考古談話会会報 第18号」新潟考古談話会
- 中本 八想・境 洋子 2005 「富山県上新川郡大沢野町布尻遺跡・布尻B遺跡試掘調査報告」大沢野町教育委員会・富山県埋蔵文化財センター
- 布尾 和史 2004 「北陸純文中層上層編年の概要—遺構出土資料を中心に—」「シンポジウム純文集落研究の新進平3 一勝坂から曾利へ— 発表要旨 資料案」純文集落研究グループ・セメント研究会
- 橋本 正 他 1965 「極楽寺遺跡発掘調査報告書」富山県教育委員会
- 橋本 正 1972 「富山県埋蔵文化財調査報告書II」富山県教育委員会

- 橋本 正 1974『高速自動車国道北陸自動車道関係埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』小杉町上野遺跡「記録写真編一』富山県教育委員会
- 橋本 正 1976『富山県大沢野町直坂Ⅱ遺跡発掘調査概要』富山県教育委員会
- 福山 俊彰 2003『富山市北押川C遺跡発掘調査報告書』富山市教育委員会
- 藤田富士夫 1973『北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告書』富山市北押川遺跡』富山文化研究会
- 古川 知明 1987『小竹貝塚』『昭和61年度富山市埋蔵文化財調査概要』富山市教育委員会
- 本田 秀仁 1997『北陸の様相』『第10回縄文セミナー 前期中葉の諸様相』縄文セミナーの会
- 麻柄 志忠 1981『富山県魚津市佐伯遺跡－県選抜張に伴う緊急調査報告－』魚津市教育委員会
- 町田 賢一・杉山 大晋 2006『北陸地方における貝塚のあり方』『紀要 富山考古学研究 第9号』財団法人富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所
- 三鍋 秀典 1993『古屋敷遺跡－発掘調査報告－』立山町教育委員会
- 三鍋 秀典・瀬戸 博子 1994『山原敷IV遺跡－発掘調査報告－』立山町教育委員会
- 官下 駿司 1989『薄手無文土器様式』『縄文土器大観1 草創期・早期・前期』小学館
- 森 秀典・山崎 典子 1990『吉峰遺跡－第7次発掘調査報告書－』立山町教育委員会
- 安 美樹 1997『能登島町通ジゾハナ遺跡』石川県立埋蔵文化財センター
- 安田 良栄 1977『天林南遺跡』『天林北遺跡』『立山町史 上巻』立山町
- 柳井 駿・神保 孝造 1975『富山県立山町吉峰遺跡 第4次緊急発掘調査概報』富山県教育委員会
- 柳井 駿 1977『富山県大沢野町布尻遺跡緊急発掘調査概要』大沢野町教育委員会
- 山内 賢一・林寺 勝利・他 1983『小竹貝塚出土の遺物について』『富山市考古資料館紀要 第13号』富山市考古資料館
- 山本 直人・小田 宽貴 2001『縄文土器のAMS ¹⁴C年代 (5)』『名古屋大学加速器質量分析計業務報告書(直)』名古屋大学年代測定総合研究センター
- 山本 正敏 1975『富山県朝日町御田遺跡・御田古墓緊急発掘調査概報』富山県教育委員会
- 山本 正敏 1975『富山県立山町金剛新造跡緊急発掘調査概要』立山町教育委員会
- 山本 正敏 1986『都市計画街路七美・太閤山・高岡線内遺跡群発掘調査概要 (4) 南太閤山I遺跡』富山県教育委員会
- 山本 正敏・大野 究 1988『永見市二町沟排水機場遺跡の資料』『大境 第12号』富山考古学会
- 山本 正敏 1991『布日沢北遺跡』『大門町企業用地内遺跡発掘調査報告 (1)』富山県埋蔵文化財センター・大門町教育委員会
- 山本 正敏 1992『富山市・姫中町平岡遺跡採集遺物の紹介』『大境 第14号』富山考古学会
- 山本 正敏 1994『北陸における早期末葉～前期初頭の土器群』『第7回縄文セミナー 早期終末・前期初頭の諸様相』縄文セミナーの会
- 山本 正敏 1999『諸職b式をとりまく中部・北陸の土器群について』『第12回縄文セミナー 前期後半の再検討』縄文セミナーの会
- 山本 正敏 2000『縄文時代前期後半の土器様相についての一考察』『大境 第20・21号』富山考古学会
- 青久 登・本江 洋 1977『小竹貝塚写真集骨角器編』
- 四柳 嘉章 1986『佐波式・桜葉寺式期』『朝日C式期』『福浦下層式期』『石川県能都町 真庭遺跡』能都町教育委員会・真庭遺跡発掘調査会

2 岩坪岡田島遺跡の古代～中世

(1) はじめに

ここでは、7世紀以降の古代・中世の岩坪岡田島遺跡を概観する。当遺跡は、西山丘陵裾部から平野部にかけて広範囲に広がるものと推定されており、現時点ですべての範囲が調査されたわけではないが、今回の調査で明らかになった範囲内で、遺跡の特徴となる点についてまとめておきたい。

(2) 古代

古代の遺構として最も古いものは、C地区北側で検出された7世紀代あるいは7世紀より若干遅る溝・竪穴状遺構・土坑であり、地形でみればド八ヶ用水より北側の台地縁辺部に広がっている。A・B1・B2・B3・C6・C7地区南半の低地部では7世紀に遡る遺構は検出されず、時代が降ってA地区で9世紀末頃の掘立柱建物が数棟みられるのみである。

7世紀代の遺構は、自然流路と溝が主体となる。自然流路S D737・S D744・S D917の流れは蛇行し、切り合いもみられるが、南側では一条の流路に終結しているため、洪水などで何度も流れを変えた小河川と推察される。一方S D697は断面形がほぼ台形を呈し、土層断面に溝浚えの痕跡を看取でき、人工の溝と推察される。S D506・S D579・S D696は小規模な溝で自然流路と人工の溝の区別は明確でないが、多くの遺物が出土し、人が積極的に関わる行為があったことが覗える。前述の自然流路S D737・S D744は7世紀のS D697に切られており、また、S D917は7世紀の須恵器壺が出土したSK847より古いことなどから、自然流路は人工の溝に先行して7世紀以前に埋没したものと考えられる。自然流路自体からはあまり遺物は出土しておらず、7世紀に生活の場あるいは生産活動の場として周辺が開かれていたのであろう。その第一段階として治水と灌漑を目的とした用水路の整備が行われたものと推察される。住居は検出されなかったが、溝等の出土遺物も多いため、今後の調査で周辺に住居が確認されることも予想される。

7世紀の遺物としては、土師器・黒色土器・須恵器・製塙土器がある。7世紀第1四半期から7世紀第4四半期のものがあり、7世紀代を通して集落が周辺に存在したものと考えられる。特に7世紀初頭の須恵器が多く、一帯の平野部の開発が急進した時期と考えられる。

今回の調査区から出土した製塙土器は棒状尖底で、県内では最も多く出土しているタイプであるが、高岡市教育委員会が調査を行った「グラスキューブ地区」では8世紀以降の平底の製塙土器が出土している¹⁰²。管見では、両者が一遺跡から出土する例はじょうぶのま遺跡・惣領浦之前遺跡等で、少數例といえる。製塙土器は焼き塙化された塙の運搬容器としても一部使用されたと考えられているが¹⁰³、全体の遺物量に対する割合からみれば須恵器・土師器の比ではなく極めて少ない。推測であるが、塙は官で管理され、他の容器に移し替えられて運搬されることが普通で、当遺跡のように内陸の消費地から製塙土器が出土する場合は、生産地から直送される特殊な事情があったのではないかとも思われる。

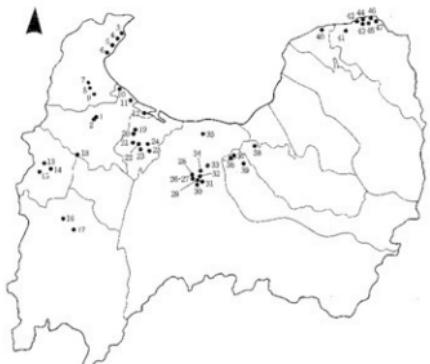
8世紀以降の古代の遺構は少ない。A地区北側で掘立柱建物が2棟検出されたが、遺構からの出土遺物がないため、包含層の遺物の年代から9世紀末と推定した。建物は今回の調査区北縁で検出されており、調査区外に建物域が広がっているとみられる。遺物は包含層や中世の遺構からではあるが、土師器・須恵器・黒色土器・灰釉陶器が出土している。灰釉陶器は転用鏡である。特筆すべきものには須恵器狼面鏡がある。狼面鏡は、出土遺跡や伝世の所在から、同鏡が宮殿・官衙・社寺において尊

¹⁰² 高岡市教育委員会：2007『沿岸御堂筋古文化遺跡』報告書の武部真也氏から御教承頂いた。
¹⁰³ 丹波義高：1976『十都朝倉と飛毛塙』『考古学研究』第22集巻3号・青山学術出版

重された形制であったと指摘されており⁶⁴、岩坪岡山島遺跡周辺の平安時代の様相を推し測るに重要な遺物と考えられる。

猿面硯は、一般に甕などの破片を転用した実用本位の硯を指す例も多いが⁶⁵、当遺跡の出土品は焼成前に端部をヘラケズリしており、硯頭の反り返りは傾斜硯としての使用に適当で、当初から猿面硯として作成されたものと考えられる。破片であるため全形を知り得ないが、硯頭から硯側にかけて残存する。硯面は一部に格子叩きが施される。硯背は無文とみられるが自然釉や器面の摩滅のため不確かである。硯面は中央部がよく研磨されており、その一部に墨痕らしきものがみられる。また、硯面と硯背の器面が墨のすり下ろしと風化のために摩滅しているのに対し、ヘラケズリされた縁端部は暗灰色を呈し滑沢を有している。これは長年粹に取り付けられていたことにより端面のみ風化を免れたものかもしれない。猿面硯は単体での使用は不可能で棒が取り付けられたと考えられており、棒縁が漆塗された豪華な品も多く現存している。

当遺跡出土品の形態は、横崎彰一氏による猿面硯の分類に照らすと⁶⁶平面形が隅丸梯形を呈する「C I 類」に相当し、平安時代後期に位置づけられる。ただ、付け加えるならばこれは硯の形態からみた分類であり、施文からみると内面に格子叩きを有する点でその亞種とも捉えられる。猿面硯に同心円が施文される意味について、横崎氏は民俗学的な見地から硯に満えられる清浄な水との関連を推しており、社寺に伝世する猿面硯がすべて同心円文を有することからも、本来猿面硯には同心円文が必要とされるのであろう。一方で、京都市西寺跡出土品のように内外面平行叩きの壺片の周縁を打ち欠いて整形したものも猿面硯とみなされている。岩坪岡田島遺跡出土硯は、先述したように転用硯ではなく当初から猿面硯として制作されたものと認められ、本来の文様の意味が失われたものと考えられる。ここではその点について踏み込んだ考察を行う用意がないが、今後、遺跡出土猿面硯などを中心に文様や施文方法などの点からも詳細な検討が必要と思われる。

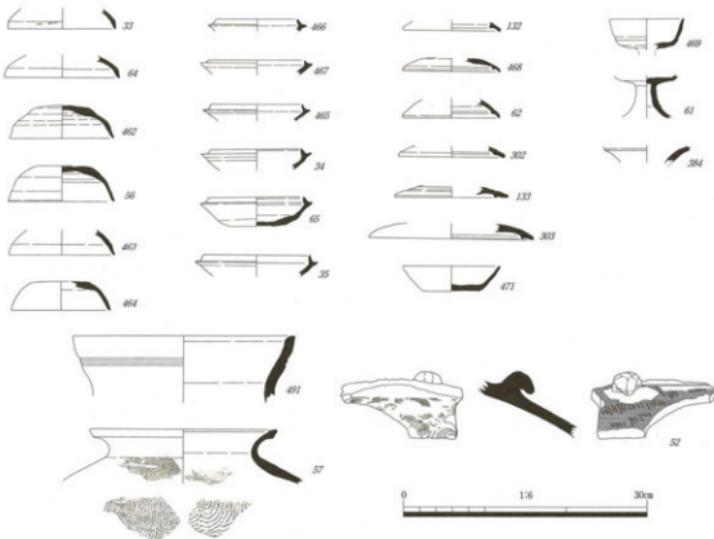


第210図 県内製塙土器出土遺跡の位置

注64 横崎彰一 1999 「窯跡について」【ミュージアムNo.64】東京国宝総説
注65 文良文化財研究所 2003 『古代の陶器をぐる路線圖-施文における文書を行政をめぐって-』
注66 日文文庫

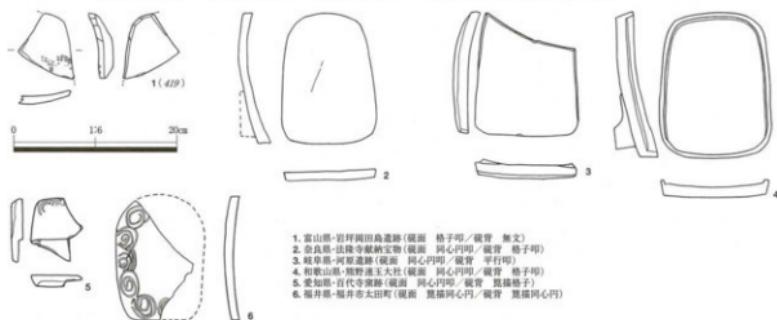
遺跡名	想定年代
丘ノ用山島遺跡	縦状灰陶/7C 平底
2 開削遺跡	平底
3 大根原窯遺跡	縦状灰陶/7C
4 久殿浜遺跡	縦状灰陶/6C末～7C初 丸底/7C～8C
5 砂利窯跡	縦状灰陶/7C
6 河内丹波八道跡	縦状灰陶
7 東山八道跡	平底
8 人矢齊川山里遺跡	縦状灰陶/平底
9 犬飼津之瀬遺跡	縦状灰陶/7C
10 山ノ道跡	縦状灰陶/7C
11 犬飼・因幡窯跡群	平底/8C末～
12 中和祝遺跡	平底
13 犬飼窯跡(庄田地区・中出地区)	縦状灰陶/7C
14 五ヶ山窯跡	平底/8C～9C
15 小伏山窯跡	平底
16 佛原落戸窯跡	縦状灰陶
17 蛇足正口山遺跡	縦状灰陶
18 石川田木屋遺跡	縦状灰陶/7C～8C
19 北山大窯跡	平底/8C
20 八ヶ森C窯跡	平底
21 布引北窯跡	平底
22 小豆瀬遺跡(池内遺跡群)A遺跡	縦状灰陶/6C末～7C初
23 小豆瀬遺跡(池内遺跡群)B遺跡	縦状灰陶/6C末～7C初
24 小豆山山頂跡	縦状灰陶/7C～中領
25 斎藤屋山口遺跡	縦状灰陶/6C後半～7C前半
26 上野南ノ口片	縦状灰陶
27 中ノ口T-V道跡	縦状灰陶/7C
28 中ノ口I道跡	平底
29 中ノ口II道跡	縦状灰陶/7C後半～8C前半
30 古谷窯跡	縦状灰陶
31 佐野松原窯跡	縦状灰陶
32 佐野田窯跡	縦状灰陶/10C前半
33 上野御遺跡	縦状灰陶/6C～8C前半
34 久慈窯跡	縦状灰陶
35 伊勢大氣賀跡	縦状灰陶
36 伊勢櫛札遺跡	縦状灰陶/6C後半～7C前半
37 吉野谷窯跡	縦状灰陶/6C末～7C初
38 仁井上道跡	縦状灰陶/7C～8C初
39 泥炭の上遺跡	縦状灰陶/6C末～7C初
40 ヒシケノ山道跡	縦状灰陶/7C 筒形灰陶/9C
41 通穴窯跡	平底/10C後半
42 有田窯跡	變型灰陶
43 高山窯跡	平底/14C後半/10C
44 滝山窯跡	小口/9C～10C
45 土山窯跡	平底
46 地山窯跡	平底/8C～8D/低/中底
47 津金窯跡	平底/9C～10C

第38表 県内製塙土器出土遺跡一覧



第211図 7世紀の土器 (1/6)

SI01 (32~35) SD10 (64・65・67~70・75・76) SD301 (130・132・133) SD696 (43・44)
SD697 (47・52) SD1485 (302) SD1504 (303) SE1106 (384) SK507 (56) SK847 (57)
SK1297 (58) SK1378 (61) SK1432 (62) 包含層 (462~469・471~477)



第212図 岩坪岡田島遺跡出土狼面鏡 類例 (橋崎1979より)

(3) 中世

中世は大きく3段階に分かれる。各期の遺構は以下のとおりである。時期を細分したため中世の大枠でしか捉えられない遺構は扱えないが、出土遺物等から詳細時期がわかる遺構や、井戸や区画溝との配置関係から時期を推定できる建物等を中心として、大まかな変遷過程を追ってみたい。

I期（12世紀中頃）

低地部にはS D 4・S D 11・S D 301といった規模の大きい自然河川あるいは沼地があり、区画溝をもつ大型の総柱建物がみられる。特に建物周辺では柱状高台の中世土師器皿や、ロクロ成形の平底の皿が目立ち、非ロクロ成形のものがみられないのに対し、台地部では逆の様相を呈する。このことから低地部の集落が台地上の集落に先行することが明らかである。低地部の集落は12世紀中頃に成立し、台地上の道路は次期の12世紀後半に敷設されたものであろう。しかしI期の建物群とII期の道路の方向はほぼ同じであり、12世紀中頃以前から存在した土地区割を踏襲する形で道路が敷設されたと考えられる。なお、この土地区割の主軸方向は真北よりやや西に振れており、7世紀段階の溝とは方向が異なる。建物は最も大型のS B 3で4間×4間で、面積は76.87m²である。その付近には面積29.74m²の側柱建物と、13.04m²の小型総柱建物がある。またそこからやや離れた東側にも、2間×4間の一部に庇が張り出す総柱建物S B 8を中心とする建物群がみられる。ここでは最大の建物で面積40.25m²、最小の建物では1間×1間で面積5.05m²となっている。隣接して整穴状の方形土坑もある。それぞれの建物群は中核となる建物と、付属的な建物から構成されているとみられる。また付近に井戸はなく、河川の水が利用されたと推察される。土錐も多く出土しており、網漁業も行われていたであろう。

II期（12世紀後半～13世紀前半）

台地縁辺部に道路S F 1が敷設される。集落の中心は台地上に移り、道路に沿って建物が並ぶ。建物はI期に引き続き総柱建物が主体と考えられ、規模は最大のS B 19で5間×3間、面積81.64m²である。最小のS B 26は1間×2間、面積10.89m²である。この最小の建物は道路側溝から枝分かれした区画溝の内部にあり、区画溝やその分岐点にある土坑と方向が同じであることから、これらに関連する性格のものと考えられる。S B 26の柱穴や土坑S K 1371に土器や銭が埋納されており、祭祀に関わる空間であろうか。井戸はほぼ建物ごとに付属するようである。井戸に結びつく建物が不明な場合もあるが、搅乱部分や調査区外に存在したかもしれない。井戸には廃絶の際に不要品がまとめて投棄されたものがある。特に調査区北西縁の井戸と土坑から鉄滓や羽口の出土が目立ち、付近で鍛冶が行われていた可能性が考えられる。井戸は素掘り井戸が多く、木組井戸はS E 1001、曲物井戸はS E 1006のみである。

低地部の建物は小規模な総柱の掘立柱建物2棟のみである。2間×2間または2間×3間で、面積は16.98～17.68m²である。主軸方向に規則性はなく、区画溝もみられない。低地部の北東端では井戸S E 1103がみられるが、この地区は後世の削平により当時の地表面が深く削り取られており、井戸の底部分のみが残ったとみられる。付近には他に詳細時期不明の井戸が数基ある。本来は台地の延長で、建物も存在したと推察される。

III期（13世紀後半～14世紀中頃）

II期に引き続き、道路に沿って掘立柱建物がならぶ。個々の建物の年代を遺物等から推定するのは難しいが、重複する場合時期が異なるのは確実で、建物の形態は総柱建物から側柱建物主体に変化する。最大のS B 16でも面積55.36m²で、全体に小型化する。井戸の形態は素掘り井戸が多く、S E 451のみ曲物の痕跡を残す。II期に道路側溝から派出していた区画溝は埋まり、その埋土上に建物S B 25

と井戸・土坑がみられる。建物や井戸、土坑の遺物は14世紀中頃までにおさまっており、村落はこの頃に他の場所へと移っていったものと考えられる。道路については、個溝出土の14世紀後半の瀬戸美濃が最終的な埋没時期を示すものであるが、14世紀前半までの遺物が圧倒的な量を占めていることから、村落の移動とともに14世紀中頃から道路も衰退していったものと推察される。

低地部にはこの頃には建物はみられなくなる。しかし本米台地の延長部であったと考えられる北東部分には井戸が存在し、Ⅱ期と同様に建物も存在していた可能性が考えられる。

(4)まとめ

岩坪岡田島遺跡周辺は東大寺領莊園「須加村墾田地」の比定地の一つとされており、現在有力説とされる須田藤の木遺跡付近を含む他の比定地も、すべて西山丘陵と小矢部川に挟まれた直径約3kmの範囲内におさまっている¹⁶⁷。

東大寺は造営のため天平感宝元年（749）に4千町歩の墾田地所有が許可され、その年の5月に東大寺占地使僧平宗が越中国を来訪している。また、天平宝字3年（759）に東大寺越中国諸郡莊園惣券、神護景雲元年（767）には墾田野地図目録帳が完成をみている¹⁶⁸。

岩坪岡田島遺跡の今回の調査区内では須加庄と直接結びつく遺構は検出されなかつたが、7世紀段階に、長く直線的に延びる溝の開削が行われており、調査区周辺では、東大寺墾田の占地に先立つ時期に、すでに灌漑と耕作の開墾作業が進んでいたものと推察される。宝字3年地図では莊園の西境は公田と接しており、すでに開発が進められて口分田の対象となっていた地域の一部に東大寺領が占地されたとの見解もあり¹⁶⁹、東大寺造営という国を挙げての一大事業を歴々と進めるために、墾田地は未開地よりもある程度開墾が進んだ地が選ばれると考えられる。ただ、7世紀末と8世紀中葉では空白期間が若干あり、当遺跡と莊園との関連を積極的に述べるには不足の感がある。しかし、今回の調査成果は須加庄以前の周辺の開発の過程を示す一資料として位置づけられ、当地の飛鳥時代集落の一端を知る手がかりとなっていくであろう。

9世紀にはわずかではあるが建物跡が存在し、調査区外に村落が広がっている可能性がある。猿面鏡等特殊な遺物も出土しており、官衙や社寺との関連も考えられる。

中世の段階では、12世紀中頃から14世紀にかけて集落が營まれていたとみられる。道路は12世紀後半に敷設され、14世紀後半に最終的に埋没するまで、長期にわたって存続した。路面の一部には、バラス敷きや、土器片等を混ぜて埋めた波板状压痕があり、路面の強化を図ったものとみられる。また、路面の補修痕とみられる溝状の遺構もある。道幅が狭いことから、幹線道路ではなく村落内の道路と考えられるが、公共の道路として整備・修復がなされていたとみられる。村落は12世紀中頃は低地部の河川近くに存在し、水源や網漁業の場として生活と河川が密接に繋がっていたが、12世紀後半に台上地上に道路が開設されると道幅に沿って村落が形成され、水源は井戸に頼るようになる。出土遺物も多様になり、物流が盛んになったものと推察される。しかし14世紀中頃までに村落は移動し、辺りは田地に帰していった。

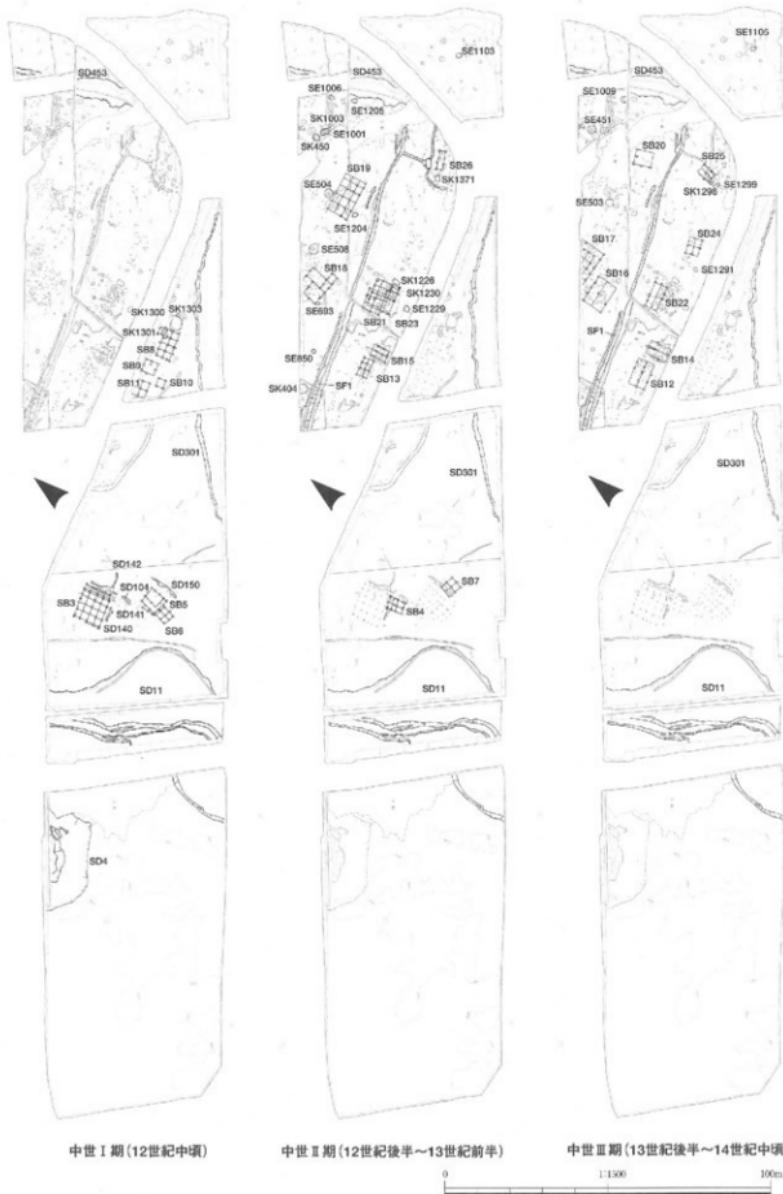
以上、岩坪岡田島の古代から中世までを概観した。建物や井戸等の遺構の形態や、遺物についての詳細な分析を欠いたが、今後の課題としたい。岩坪岡田島遺跡は西山丘陵裾部から小矢部川低地にかけて広範囲に広がる遺跡であり、また、間尽遺跡や手洗野赤浦遺跡等が隣接している。今後の調査の進展に伴って、今回得られた調査結果がさらに深く検証されていくことを期待したい。

（越前慎子）

167 事記 岩坪島 「奈良平 宗室と壁室の場所」
168 菊間茂之助著「1975『日本古墳地盤集成』岩坪岡田島
169 金田翠和1985「奈良と村落の変遷地盤学研究」大明堂
1998「古代庄園と令説」東京大学出版会



第213図 岩坪岡田島遺跡の変遷（古代）（1：1,500）



第214図 岩坪岡田島遺跡の変遷（中世）（1:1,500）

県内製塩土器出土遺跡 文献

- 1 本吉敏
2 岸本雅敏 1983 「富山県における上器製塩の成立と展開」『北陸の考古学』石川考古学研究会会誌第25号 沼田善太郎 1953 「土師尖底土器の考察」『石川考古学研究会会誌第5号』
- 3 深井 1962 「水見海岸の人文景観と文化財」『水見海岸上・山手術調査会合』宮山惠
- 4 芦本雅敏 1985 「五ヶ瀬遺跡の製塩土器」『人城郷土祭』宮山考古学会
- 5 芦本雅敏 1983 「富山県における上器製塩の成立と展開」『北陸の考古学』石川考古学研究会会誌第26号 水見高校歴史クラブ 1964 「九段遺跡」『富山県地方考古学遺跡と遺物』
- 6 原本雅敏 1974 「水見市九段浜遺跡調査報告書」富山県教育委員会内部資料
- 7 原本雅敏 1975 「九段浜製塩跡」『日本考古学年報27』日本考古学協会
- 8 水見市教育委員会 1975 「富山県水見市九段浜製塩遺跡調査報告書」
- 9 水見市史編纂委員会 2001 「水見市史7. 資料編五 考古」
- 10 原本雅敏 1983 「富山県における十部製塩の成立と展開」『北陸の考古学』石川考古学研究会会誌第26号
- 11 水見市教育委員会 1993 「水見ハイパス開通跡発掘調査報告書」Ⅱ 阿尾尾尾ア道跡概要
- 12 水見市教育委員会 1996 「水見ハイパス開通跡発掘調査報告書Ⅲ」
- 13 富山県埋蔵文化財センター 2003 「富山県埋蔵文化財センター年報－平成16年度－」
- 14 富山県埋蔵文化財センター 2004 「埋蔵文化財調査概要 平成15年度」
- 15 野村雅典 1983 「富山県における上器製塩の成立と展開」『北陸の考古学』石川考古学研究会会誌第26号
- 16 芦本雅敏 1976 「富山県小杉町」『日本考古学年報28』日本考古学協会
- 17 畠山県教育委員会 1982 「富山県小杉町、大門町八木道遺跡発掘調査第3、4次緊急発掘調査概要」
- 18 高岡市教育委員会 1988 「越中國の鐵道遺跡調査概要Ⅱ」
- 19 高岡市教育委員会 1991 「越中國の鐵道遺跡調査概要V」
- 20 小杉地学研究会 1966 「生出湖周辺の考古学的研究所第2集」
- 21 小矢部市教育委員会 1983 「富山県小矢部市山元町遺跡発掘調査報告書 称ミ・占墳・古代・中世編I」
- 22 小矢部市教育委員会 1991 「富山県小矢部市越後向日町遺跡調査報告書」
- 23 財団法人富山県文化振興財团 1998 「五ヶ瀬遺跡発掘調査報告－能登駅自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告」
- 24 小矢部市教育委員会 1998 「富山県小矢部市山元町遺跡 白谷丙ノ坂北道路一円沿岸区土地改良総合整備事業に伴う発掘調査－」
- 25 福光町教育委員会 1996 「富山県福光町御原落戸遺跡調査」
- 26 高橋真実 2001 「第2章 灰陶土器について」『富山井口1号坑遺跡正覚寺遺跡2』井口村教育委員会
- 27 財団法人富山県文化振興財团 2002 「石名木舟遺跡発掘調査報告書」
- 28 大島町教育委員会 1995 「富山県人鳥町北高木遺跡発掘調査報告書」
- 29 大島町教育委員会 2000 「富山県人鳥町北高木遺跡発掘調査報告(2)－」
- 30 富山県教育委員会 1992 「大門町越文化財調査報告第8号大門町企楽園地内遺跡発掘調査報告(2)－布目沢北遺跡第3次調査－」
- 31 高浜町 1985 「高浜町史」
富山県教育委員会 1982 「富山県小杉町、大門町小杉通渠業閉地内遺跡群第3、4次緊急発掘調査概要」
高浜町 1988 「高浜町史」
- 32 富山県教育委員会 1982 「富山県小杉町、大門町小杉通渠業閉地内遺跡群第3、4次緊急発掘調査概要」
- 33 高浜町 1985 「高浜町史」
富山県教育委員会 1983 「富山県小杉町、大門町小杉通渠業閉地内遺跡群第5次緊急発掘調査概要」
富山県教育委員会 1984 「富山県小杉町、大門町小杉通渠業閉地内遺跡群第6次緊急発掘調査概要」
- 34 富山県教育委員会 1984 「富山県創立街跡七美、太閤山・高岡城内遺跡群発掘調査概要(2)」
- 35 小杉町教育委員会 1991 「上野南遺跡発掘調査報告」
- 36 財団法人富山県文化振興財团 2003 「[名1]・[名2]遺跡発掘調査報告」
- 37 柳町教育委員会 2004 「富山県柳町砂子田遺跡発掘調査報告」
- 38 財団法人富山県文化振興財团 2002 「勝手鳥島遺跡、名島II遺跡、持田I遺跡発掘調査報告」
- 39 富山県埋蔵文化財センター 1994 「富山県總合運動公園内遺跡群発掘調査報告(4)」
- 40 富山県埋蔵文化財センター 1990 「富山県總合運動公園内遺跡群発掘調査概要！」
- 41 富山県埋蔵文化財センター 1990 「富山市任海町田原遺跡発掘調査報告」
- 42 富山県埋蔵文化財センター 1996 「富山県富山市任海町遺跡発掘調査報告書」
- 43 畠山市教育委員会 1996 「富山上新保遺跡試掘調査報告」
- 44 財団法人富山県文化振興財团 2004 「[名1]・[名2]遺跡発掘調査報告」
- 45 富山市教育委員会 2006 「富山市上新保大坂跡発掘調査報告書」
- 46 立山市教育委員会 2001 「利根横浜遺跡－主要地方遺跡立山山角遺跡地方特定道路事業に伴う調査報告書」
- 47 末廣町教育委員会 2002 「富山県舟橋村古海岸老江遺跡発掘調査報告－宅地造成に伴う発掘調査報告－」
- 48 高浜町 1985 「高浜町史」
1.市町教育委員会 1981 「東江上遺跡」「北陸自動車道遺跡調査報告－上市町構築－」
1.市町教育委員会 1982 「東江上遺跡」「北陸自動車道遺跡調査報告－上市町土器・石器類－」
- 49 富山県教育委員会 1982 「辻坂の上遺跡」「北陸自動車道遺跡調査報告－上市町土器・石器類－」
- 50 高浜町 1985 「高浜町史」
芦本雅敏 1986 「[よし]のま遺跡の調査土器と二、三の問題」『入善町じょうべのま遺跡発掘調査報告(5)』人善町教育委員会
富山県教育委員会 1974 「土器品」『富山県埋蔵文化財調査報告書』
- 51 松島吉信 1984 「まとめ（2） 調査土器について」『北陸自動車道遺跡調査報告書－朝日町編－道上遺跡』富山県教育委員会
- 52 朝日町教育委員会 2000 「富山県朝日町羽原・境地区発掘調査報告書」
- 53 富山県教育委員会 1987 「北陸自動車道遺跡調査報告書－朝日町櫛3－」
- 54 富山県埋蔵文化財センター 1998 「富山県埋蔵文化財センター年報平成7年度」
- 55 富山県教育委員会 1985 「北陸自動車道遺跡調査報告書－朝日町櫛2－」
- 56 朝日町教育委員会 1999 「富山県朝日町櫛開闢発掘調査報告」
- 57 高浜町 1985 「高浜町史」
富山県教育委員会 1979 「兼金原遺跡」『昭和53年度富山県埋蔵文化財調査一覧』

3 手洗野赤浦遺跡の変遷

-中世中頃～後期の方格地割集落-

(1) はじめに

手洗野赤浦遺跡は、低地部（ここでは谷状地 S D18と自然流路 S D 4を低地と呼ぶことにする）の埋没によって断絶された期間があり、これによって最も明確な時期差が示される。低地と微高地からなる地形がいつ形成されたのかは不明であるが、遺跡周辺は小矢部川低地とよばれる氾濫平野で、近世の文書にも元禄16年（1703）の洪水被害をはじめとして度重なる洪水の記録が残されていることから、古来幾度となく洪水が起り、表層の微地形が変化してきたものと考えられる。河川の浸食作用により低地となることもあれば、また淀んだ湿地的環境となり再び埋没していった時期もある。

発掘調査の結果、手洗野赤浦遺跡に人の生活痕が遺された最初の段階、14世紀前半においては、地表面が平坦でなく、高低差のある場所であったことが明らかになった。当時の地形は、西側の低地と微高地の標高差が約20～40cmで、緩やかな勾配となっており、激しい高低差があるわけではないが、水のつきやすい低地なぜ建物が存在するのかが調査当時からの疑問であった。しかし、中世土師器皿等が遺構検出面であるⅢ層直上に並んで出土したことから、当時の生活面がⅢ層直上であることは確実で、これが後世削平されることなくパックされた状態で埋没したものと考えられる。低地が埋没し、微高地と低地の高低差がほとんどなくなった後、再び建物、井戸、畠等が形成される。微高地では、低地の埋没以前である14世紀前半段階から埋没後の15世紀後半乃至16世紀にかけて遺構の変遷がみられる。ここでは、低地と微高地の遺構がどのように変遷していったのかを考え、遺跡の全体像を可能な限り復原してみたい。しかし、堀立柱建物等の遺構が重複していても埋土の切り合いがみられず、遺物からもはっきりした時期差がわからない場合も多い。そこで、個別の遺構の時期を念頭に置き、道路や建物の区画溝と建物や井戸の配置から主な遺構のセット関係を考えていこうと思う。

(2) 道路の推定

手洗野赤浦遺跡の溝は、幅の広いものでは1m前後、細いものでは30cm前後と若干の差はあるものの、深さは20cmを越えるものではなく、大規模な区画溝や用水はない。また幅の大小にかかわらず、ほとんどがほぼ東西・南北の方角に則ってのびている。2条が併走する場合は道路の可能性が高く、建物を取り囲んでいる場合は建物の領域を区画する溝と考えられるが、どちらも方角を意識した方格地割が整備されていたと推測される。その区画の基本となる道路を、はじめに推定する。波板状压痕等路面の遺構はないため、併走する溝を道路の条件として推定していく。

S F 1

調査区中央の微高地にある南北方向の道路で、S D110を西側の側溝、S D 6・S D109を東側の側溝とする。S D110の南半は浅くなるとともに幅が広がり遺構の肩が不明になるが、本来は北半の溝の幅であったものが後世に崩れたものと考えられる。道路幅は側溝の心々距離で2.5m前後である。S D151・S D170等、S D110から派生して道路面を横切って池（S D 5）に繋がる溝は、側溝から水が溢れて路面が冠水するとき、池への排水を行うために設けられた溝と推測する。調査区内という狭い範囲内での推定であるが、微高地上を南北に縱走する幹線道路と考える。

側溝の遺物は古いもので13世紀後半～14世紀中頃、新しいもので15世紀後半のものがあることから、

14世紀前半に開削された可能性があり、15世紀後半頃に埋没したと推定される。

S F 2

S F 1 から東方へ直角に曲がる道路で、S D 6 を北側の側溝、S D237を南側の側溝とする。側溝を確認できた長さは約9mのみであるが、その先はS D 4 の北縁となることから、浸食作用により道路が崩壊した可能性が考えられ、本来は東方に延長部分があったものと推測する。道路幅は側溝の心々距離で1.5m前後とやや狭い。

S F 1 の側溝である S D 6 が屈曲して S F 2 の側溝になっていることから、S F 2 の年代は S F 1 と同時期と考えられる。

S F 3

低地（S D18とした谷状地）南端の舌状にのびる微高地上にある南北方向の道路で、S D156を東側の側溝とする。S D156は約39mの長さが確認されている。西側の側溝は検出されていないが、逆に舌状に延びる微高地のやや急な高まりがあり、センターのラインがS D156と平行になる部分は路面を平坦に整地するため高まりを削った痕跡かと思われる。そのように考えた場合、推定道路幅は3m前後になる。側溝からの遺物の出土はないが、配置からS F 4 と同時期と考えられる。

S F 4

低地部にある東西方向の道路で、S D69を北側の側溝、S D169を南側の側溝とする。S D69は約14mの長さが検出されており、西側の末端がS D156の延長線上にあることからS F 3 とS F 4 の辻（交差点）と考えられる。道路幅は側溝の心々距離で4m前後である。S D69は北側の建物群の区画溝としての役割も併せもっていたと考えられる。

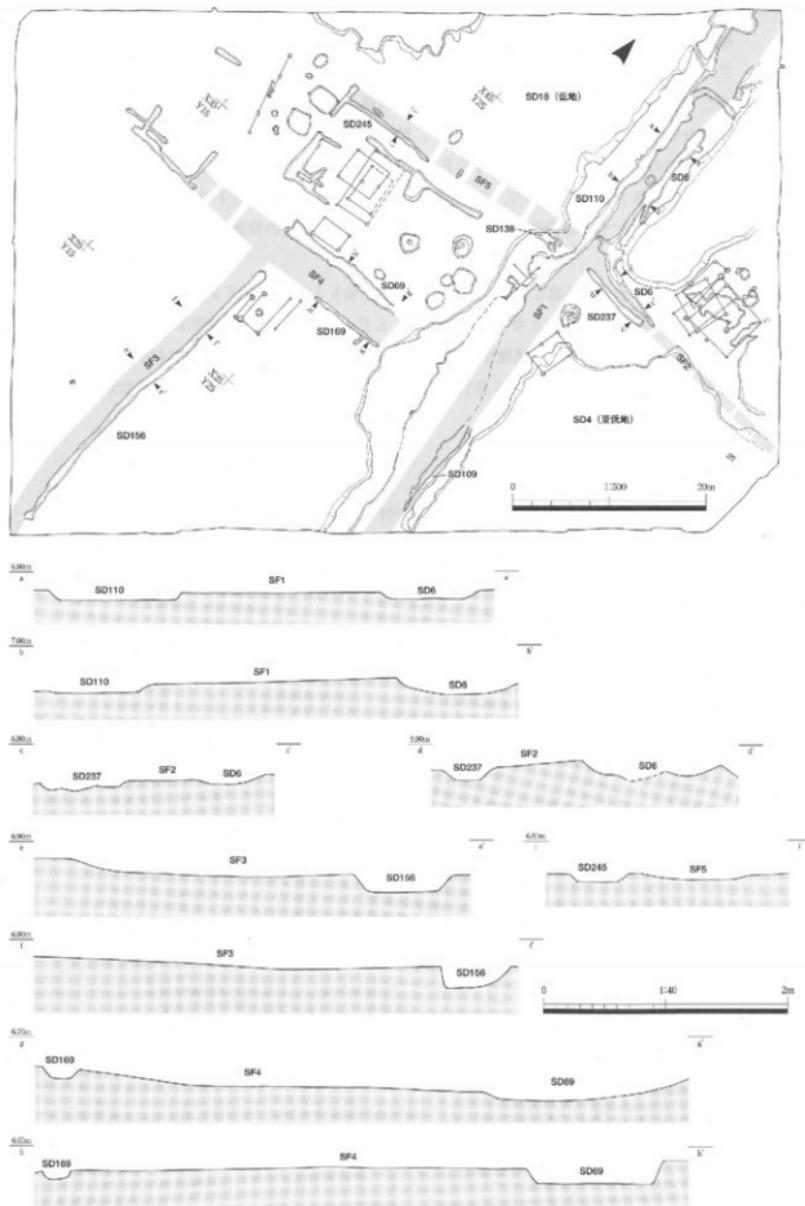
S F 5

低地部にある東西方向の道路で、S D245を南側の側溝とする。S D245の確認できた長さは約11mのみであるが、延長線上にはS D138・S D237があり、S F 2 に繋がるので、S F 1 とS F 2・5 とが交差していたものと推定する。S D245は南側の建物群の区画溝としての役割も併せ持っていたと考えられる。S D245の北にはセンターから帯状に窪む地形が看取され、側溝の跡と考えた場合は推定道路幅は1.2m前後となる。

以上のように道路を想定すると、これらがほぼ東西南北方向の方格地割に則った直路であることがわかる。それぞれの道路の存続期間について、S F 1 の側溝の遺物の年代と、S F 1・2 に沿って比較的長期に亘って建物等の変遷が窺えることから、S F 1・2 が15世紀後半もしくは16世紀まで存続すると推定される。しかしS F 3～5 は低地の埋没によって消滅する。また、S F 4 とS F 5 に挟まれた区域には建物の建て替えがあり、建物の周囲を方形に区画する溝が方向はそのまま北西の方角へと移動する。建物と区画溝のセット関係と新旧については後述するが、区画溝と道路側溝を兼ねるものもあり、道路の新旧関係も導き出される。道路の変遷をまとめると、おおよそ次の3期に区分される。

遺構	主軸方向	時期
S F 1	N- 5°-W	I～III期
S F 2	N- 87°-W	I～III期
S F 3	真北	I(～II)期
S F 4	N- 87°-E	I(～II)期
S F 5	N- 80°-E	II期
S B 1	N- 83°-E	II期
S B 2	N- 7°-W	I期
S B 3	N- 82°-W	I期
S B 4	真北	I期
S B 5	N- 10°-E	II期
S B 6	N- 10°-E	II期
S B 7	N- 73°-W	II期
S B 8	N- 8°-E	II期
S B 9	N- 2°-E	I期
S B 10	N- 1°-W	I期
S B 11	N- 8°-E	II期
S B 12	N- 51°-E	III期
S A 1	N- 20°-W	II期
S A 2	N- 15°-W	II期
S D33	N- 80°-E	I期
S D69	N- 85°-E	I期
S D139	真北	I(～II)期
S D140	N- 87°-W	I(～II)期
S D141	真北	I(～II)期
S D142	N- 20°-W	I(～II)期
S D173	N- 7°-W	II期
S D174	N- 85°-E	II期
S D175	真北	I期
S D181	N- 89°-E	II期
S D330	N- 80°-E	II期

第39表 道路・掘立柱建物等主軸方向



第215図 手洗野赤浦遺跡の道路

I期：南北方向にS F 1・S F 3が通り、その間は約27~28mである。東西方向にS F 2・4が通り、その間は約19mである。S F 1・3は道路幅も側溝幅も広く、調査区外に存在するであろう他の集落へと続く主要な道路とみられる。この2本の道路は中央の微高地と、低地とした範囲内でも緩やかに高まりを見せる南側の微高地上にある。

II期：I期から既存のS F 1・S F 2は残るが、建物の区画溝が北西方向へ移るとともに、低地の東西方向の主要道路もS F 4からS F 5に移ると推定する。これにより東西方向の道路がS F 2からS F 5へと繋がり、S F 1との辻ができる。I期のS F 3・S F 4がII期にも残っていたかどうかは遺物もないため確証はないが、建物の位置が変わっても道路が残る可能性はある。

III期：低地部が埋没し、微高地との高低差がなくなった後もS F 1・S F 2は残り、集落の主要な道路として機能したものと考える。ただし、S F 1の側溝SD110の南半は肩が崩壊して溝幅が広がり、埋没した上に建物が建つ。新しく作り替えられた側溝の痕跡は検出されなかつたが、低地の南部の埋土上にS B11等の建物があるので、修復された道路がほぼ同じ位置に存在したと推測される。

(3) 各期の遺構

前節で区分したI～III期の道路にどのような遺構が伴うのかを検討する。年代を推定できる遺物が出土していないため時期決定が困難な遺構も多いが、遺構配置から道路との関係を推測しやすい建物とその区画溝、井戸、大型土坑などを主体に考えていく。各遺構の年代や切り合い関係などの詳細は前章で述べてきたのでここでは省略する。

特に建物については、柱に含有される放射性炭素から年代がわかる柱穴以外は詳細な年代を知り得る遺物が出土していないため、前章では大まかな年代のみを推定してきたが、ここでは重複する建物の前後関係を区画溝や井戸等とのセット関係から考察し、詳細年代を推定していきたい。

また、低地部には溝に囲まれた方形区画がみられるが、後述するように区画溝群は2時期に分かれると考えられ、I期・II期それぞれに建物とそれを囲繞する方形区画が存在したと考えられる。I期とII期の方形区画は、両者とも東西・南北の方向にはほぼ合致しているが、若干位置がずれており南北の幅も異なる。その前後関係については、土器祭祀に使用された中世土器が落ちかけた状態で出土したSD245を含む北西位置の方形区画を、低地部が埋没する直前の区画と推定する。

I期

低地部では溝SD33・SD69・SD175に囲まれた方形区画の中に掘立柱建物SB2・SB3と井戸SE158がある。また、道路S F 3とS F 4の辻の南東にSB4があり、S F 3の路傍には土坑SK155がみられる。詳細年代のわかる遺物が出土していないため、区画溝と建物の関係については配置関係から考えたい。SB3はII期の区画に入らないため、I期のものであろう。SB1・2は重複しており新旧関係があると考えられるが、南西よりのSB2をI期の建物と考えておく。SB2は土器集中地点とも重複する部分が広く、土器祭祀が行われたII期とは時期が異なると考えられるからである。SE158はII期の区画からは若干遠いが、I期の方形区画の南北幅のはば中央に位置することからI期の井戸とみてよからう。この井戸は掘形の隅から呪符木簡が出土している。このように、I期の方形区画溝内には2棟の建物と1基の井戸がある。建物面積の大きいSB2(25.02m²)が主となる建物で、小型のSB3(6.28m²)は倉庫等の付属屋の建物であろう。また、井戸は区画の中央に

構えられており、この方形区画内において重要な意味を持つ存在であったであろう。土坑SK47は底面の漆器から14世紀の遺構と考えられ、SD33との切り合いについては不明であるが、I期の遺構と考えられる。性格は不明であるが、SB2に関連する遺構であろう。

SF3については上述したようにII期まで存続する可能性を考えられる。従ってその路傍にあるSK155や辻にあるSB4もII期の遺構である可能性があるが、ここではI期の可能性が高いものとして考える。SK155の性格は不明瞭であるが、深さが他の井戸に比べて浅いことなどから井戸以外のものと考えられ、集落域を外れていながら道路際に位置する点から墓の可能性が考えられる。低地部の遺構はこの他にSF4の西側に方形区画の一部とみられる溝も検出されているが、建物等ではなく、詳細時期は不明である。

微高地には池SD5、掘立柱建物SB9・SB10、SE41がある。池SD5とSF1の側溝SD6との併存関係については前章で述べた。この池は調査区外に延びるため全体像を知ることができないが、長軸方向が方格地割に沿った長楕円形の池が道路際に設けられたのであろう。池の用途は前章で述べたように灌漑用の溜池、養魚池等水田に関わる池と推測する。SB9・10は主軸方向がN-1°-E、N-2°-Eではほぼ真北に向くことから同時期の建物と考えられ、切り合いでSB10がSB8より古いため両者はI期の建物と考えられる。ただしSB10については、残存する柱から建物形態の一つの可能性として推定したものではあるが、平面形がやや歪であるため検討を要する建物である。SB9は建物面積が27.68m²で、当遺跡の中では大型の類であり、住居の可能性もある。建物を開む溝や建物に伴うと考えられる井戸はない。一部の柱穴は、13世紀末～14世紀初頭の古瀬戸が出土した不整形な土坑SK12の埋上にかかっており、整地後に建てられた可能性がある。SE41は付近に同時期の建物が存在しないので、道路の辻付近に設けられた共同井戸と考えられる。

東側低地部にはSE183がある。東側低地部ではこの他に遺構はなく、SE183は低地の中でも縁辺に近い場所にある。前述したようにこの低地(SD4)の北縁は元はSF2の延長部があったものと推定され、SE183も道路際の井戸であった可能性が高い。

また、この時期の井戸は、曲物積み上げ(SE158)、石組み+曲物(SE41)、植物貼り付け+曲物(SE183)と3種類であるが、下部に曲物を使用し、上部の掘形が大きいものでも下部は曲物を入れる部分しか掘り下げない点が共通している。

II期

低地には溝SD245・SD173・SD181に開まれた方形区画の中にSB1があり、方形区画外の西側に大型土坑SK133・SK134がある。SB1の面積は13.58m²で小型の建物である。SK133・SK134は区画溝が途切れた部分に位置し、建物への入り口付近に何らかの付属施設があった可能性もある。SK134の西に位置する単独の柱穴SP135からはクリ材の大型の柱が出土しているが、何か象徴的な柱であろうか。さらに西側には柱列があるが、この柱列は検出した柱の間隔が不均等であり両端に柱が残るもので、塀や門であったかもしれない。これらの柱の時期についても詳細は不明ではあるが、配置からみた可能性としてII期に含めた。II期の方形区画内には、「土器集中地点」とした中世土師器や中国製青磁による土器祭祀空間がある。方形区画内の位置としては北東部分に当たっている。低地ではこの他にSE40がある。建物や道路からは若干離れた位置にあり、建物に伴う井戸か、共同井戸かの別は判然としない。井戸の形態は、I期と異なり、湧水面まで全体を大きく掘り下げた後、中央に石組を組み上げて裏込めをおこなうものである。井戸側として確認されたのは石組だけであるが、曲物が抜き取られた可能性もある。

微高地には、池 S D 5 が I 期から引き続いて存在し、建物 S B 8 がある。S B 8 は主軸が N-8°-E で I 期の建物より若干東に振れる。面積は 16.75m² でやや小型であるが、住居の可能性もある。

Ⅲ期

低地は埋没して、遺構面はほぼ平坦になる。

道路は S F 1・S F 2 のみが引き続き存在する。池 S D 5 も存続していた可能性がある。掘立柱建物は、S F 1 の側溝より新しい S B 5・S B 6、低地埋没後の S B 11・12 があり、この他に微高地北東部の S B 7 も S B 8~10 との切り合はないものの重複しているため、主軸が真北方向よりさらに東へ傾いたものと解釈してⅢ期に含めておく。このうち S B 5・12 については柱が出土してはいるものの不完全な形態で住居としては確証を得ない。残る建物のうち、やや面積の大きい S B 11 (33.87 m²)・やや小型の S B 7 (15.31m²) は住居の可能性があるが、S B 6 (9.93m²) は住居とするには小規模の建物である。井戸は長径約 3.5m と大口径で、全体を 30cm ほど一旦掘り下げてから中央の直径約 1.8m の部分をさらに掘り下げる二段掘りになってはいるが、2 段目は II 期の井戸と同じく湧水頭まで全体を大きく掘り下げており、中央に曲物を据えて周囲を石組で固めている。石組に軟質の石材を用いる点は I 期から変わっていない。S B 11 に隣接し、道路からやや離れていることから、屋敷内の井戸であろう。道路や住居から離れた調査区末端には烟がある。烟の散溝はほぼ南北方向を向いており、周辺の耕地は低地埋没後も前段階の地割を踏襲した再開発が進められたものと考えられる。

(4) 各期の年代

手洗野赤浦遺跡の遺構を以上のように大きくⅢ期に分けた。ここでは各期の年代について考えたい。I 期のはじまりは井戸枠等の年輪年代から推定できよう。S E 41 の井戸枠である曲物の年輪年代は 1296 年、S E 183 から出土した折敷の年輪年代は 1306 年であり³²⁰、これら 2 基の井戸は 14 世紀前半の井戸であろう。道路の年代も前述したように出土遺物から 14 世紀前半に敷設された可能性があり、該期には方格地割に則った集落の開発が進められたものと考えられる。低地の方形区画に囲まれた建物や井戸は年代を示す遺物は出土していないが、II 期の方形区画よりは古いと考えられる。方形区画内の建物に隣接する S K 47 も底面の漆器から 14 世紀と推定される遺構で、建物及び井戸 S E 158 もこの土坑と同時期の可能性が高い。ただ、S E 41・183 と同様に 14 世紀前半まで遡るかどうかは不明である。方形区画溝に囲まれた建物は I 期と II 期それぞれに一箇所のみ存在する特殊な存在であることから、期間を挟まず建て替えられた可能性が高いと考えられる。

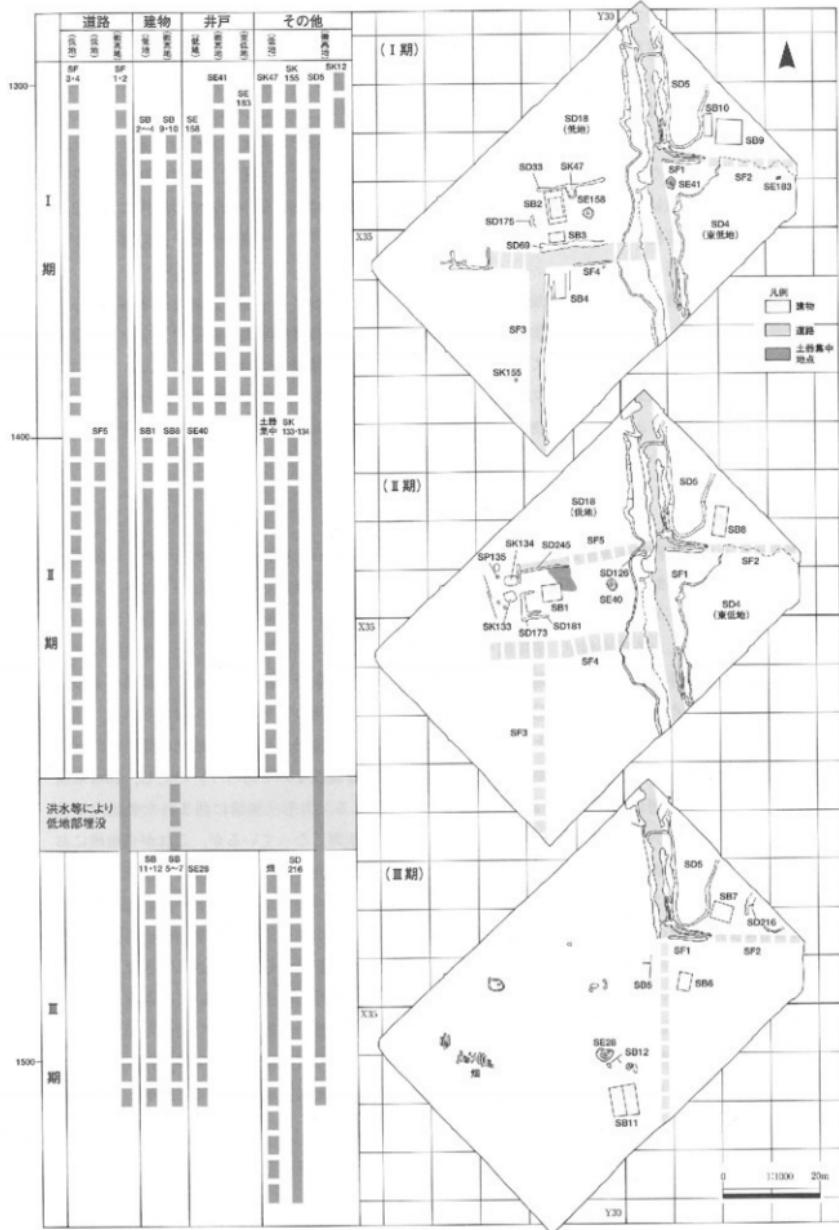
II 期の方形区画に囲まれた建物の年代は土器祭祀に使用された中世土師器・中国製青磁から推定されよう。中世土師器は特殊なタイプであるため県内の出土例からは明確な時期を比定できないが、越中では 16 世紀初頭前後に京都系土師器の強い影響を受けることが知られており³²¹、当遺跡の土器祭祀に使用された中世土師器はそれ以前の土師器皿の一つの形態を示すものと思われる。全く同じ形態とはいえないが、梅原胡摩堂遺跡等では 13 世紀後半～15 世紀後半頃に位置づけられるロクロ成形の土師器に、当遺跡の土師器に似た特徴である、非ロクロ成形皿写しのロクロ成形皿（12 世紀後半頃までの椀形の皿ではなく、見込みが広く体部は丸みを帯びて短く立ち上がる形態）がある³²²。また手洗野赤浦遺跡の土器祭祀の皿は口径 9~11cm で、中世前期に一般的な大小の規格からみると中間的なサイズになっている。14 世紀中頃から、「大土器・小土器」という二分極の法量規定から脱した規格の細分化が普及する³²³、土器祭祀の皿もこの時期を遡らないであろう。このようなことから土器祭祀の土師器は 15 世紀、遡っても 14 世紀末頃のものといえよう。土器祭祀に使用された中国製青磁が 14 世紀前

320 第一公林「自耕作分析 光谷伝説『3. 手洗野赤浦遺跡』」岩谷新興農業技術上巻の年輪年代。

321 宮崎美津1986「越中国弓山城の土器器 12世紀後半と14世紀」「大坂」第10号、富山考古学会。

322 富山市文化財資料1996「馬鹿御腰と道楽堀田の土器」(出土物)。

323 清水基樹1994「かわらけ考(3)」「中世都市研究 第3号」小笠原志研究会。



第216図 手洗野赤浦遺跡 主要構造変遷図

半～15世紀前半のものであることも矛盾しない。SK134も出土したモモ核の放射性炭素から14世紀末～15世紀前半と推定される。これらのことから方形区画内の建物の年代は14世紀末～15世紀前半と推定し、I・II期の境界は14世紀後半～15世紀初頭頃と考える。また低地と微高地では建物の推移を別々に考えざるを得ないが、SB8の柱の放射性炭素年代からこの建物が15世紀前半のものであることが明らかであるので、II期の年代としては14世紀末～15世紀前半を当ておくのが適当と考える。これは低地が埋没した際に堆積した埋土中の遺物が15世紀後半までにおさまることでも整合性がある。ただ、一つの疑問点は低地のSE40の遺物のうち、土器・陶磁器は15世紀中頃までの年代におさまるもの、扇文の漆器椀が他遺跡の出土例では16世紀とされる点で²⁷⁴、この漆器が15世紀に遡るかが今後の検討課題となろう。

III期は低地埋没後であり、15世紀後半以降になる。建物のうちSB6は柱の放射性炭素年代から15世紀後半に推定される。この他の建物・井戸は遺物が小破片のため詳細時期を推定できない。しかし井戸の形態がII期からあまり変化していないため、II期とIII期の期間の断絶は長期に亘るものではないと考えられる。北東端には16世紀の漆器が出土したSD216があり、自然流路の一部と考えられるが、本体は調査区外にあるため、建物との関係等、詳細は不明である。以上のことからIII期は15世紀後半～16世紀初頭頃の年代が当てられよう。

(5)まとめ

以上のように、手洗野赤浦遺跡では14世紀前半に方格地割に則った村落の開発が行われ、洪水等により一部埋没した時期を経て再び復興し、16世紀初頭に至るまでの変遷を辿ることができる。東西・南北を結ぶ道路は一町方格（約109m）を半折型・長地型に区切った典型的な条理地割ではないが、それ以前から存在した条理地割が、班田制や王朝国家体制の元での莊園制が解体した中世段階の開発により、微地形条件等を考慮した土地区分に再編された結果の事象とも推察される。中世的な条理景観の中に、住居が点在し、灌漑等を目的とした溜池が造られ、路傍には共同井戸が設けられる。建物は側柱建物で、面積は最大で約34m²と小規模であるが、県内の14世紀～15世紀の掘立柱建物は50m²以下が主体を占める²⁷⁵とされ、この時期の住居としては平均的な規模なのであろう。ただし、10m²未満の小規模な建物は住居以外の建物であった可能性も考えられる。方形区画構に囲まれた敷地内では、井戸祭祀、土器祭祀が行われており、調査の中では特殊な空間となっているが、これが当地域において該期に普遍的な祭祀形態の一つであったかどうかは今後の調査事例の増加を待って検証する必要がある。井戸の形態は湧水点に迫り着くまでの掘形の規模に工法の変化がみられるが、石組の石材の多くは伝統的に軟質の凝灰質泥岩が選ばれている。この石材は石川県金沢市から富山県小矢部市にかけて分布する大桑層の泥質部から産出するもので²⁷⁶、近隣の西山丘陵から切り出されてきたものであろう。井戸の様相は中世前期の岩坪岡田島遺跡と異なっており、地山の土質の違いにもよろうが、井戸構築技術の革新があったものと考えられる。以上手洗野赤浦遺跡の変遷について述べたが、筆者の力量不足により未だ明らかにし得ない部分が多い。大方の御批判と御教示を請う次第である。

なお、起稿にあたり水野正好氏に多くの御教示を頂きました。末尾ながら記して感謝申し上げます。

（越前慎子）

274 国際収集による。

275 宮井圭一「第2章 まとめ 2. 風土性建物」『海女岩手県遠野市発掘調査報告書（第2回）』、財团法人岩手県文化振興財團

参考文献

(ここでは第Ⅲ～V章で扱った参考文献を掲載する。第Ⅱ・VI章の参考文献は各文末に記した。)

- イ 池野 正男 1986 「富山市平岡廻跡採取遺物の紹介」「大境」第10号 富山考古学会
 1987 「射水丘陵における8～10世紀後半の須恵器窯跡」「大境」第11号 富山考古学会
 1988 「射水丘陵における9～10世紀後半の須恵器窯跡」「大境」第12号 富山考古学会
 1997 「越中における9世紀代の上器製本」「北陸古代土器研究」北陸上器研究会
 石川考古学会・北陸古代土器研究会 1988 「シンボジウム 北陸の古代土器研究の現状と課題」
 岩田 雅 1997 「越中6章第2節『越前』に「中・近世の北陸・考古学が語る社会史』」北陸中量土器研究会
 ウ 上田 秀夫 1982 「14～16世紀の賣鐵鏡の型式分類について」「貿易通商研究62」日本貿易陶磁研究会
 上野 一章 2005 「地中の7世紀の須恵器変遷について」「ふくおか歴史文化フォーラム『ふくおかの飛鳥時代を考える』資料集」福岡市教育委員会・富山考古学会
 内川ア紀子 2002 「富山県の黒色土器—6～8世紀の県内資料を中心として—」「富山考古学研究」第5号 財团法人富山県文化振興財团
 2003 「富山県の黒色土器(2)—9～11世紀の県内資料を中心として—」「富山考古学研究」第6号 財团法人富山県文化振興財团
 宇野 伸夫 1982 「井戸考」「史林」第65号第5号
 2001 「狂言の考古学」青木書店
- ニ 稲荷 信子 1996 「第4章 考察 1 梅原胡麻堂遺跡の中世上器器皿の編年」「梅原胡麻堂遺跡発掘調査報告(遺物編)」財团法人富山県文化振興財团
 大鳥町教育委員会 2000 「水上・本開発遺跡—近世北陸道発掘調査報告—」
 大野 実 他 2002 「水見市史」水見市史編さん委員会
 人情 康二 1987 「地獄阿彌陀」「考古学ライブリー55」ニューサイエンス社
 1988 「別冊太陽「古伊万里」」平凡社
 長沼 淳爾 1976 「奈良大寺の墓園地」「富山県史 漢史編」原始・古代 富山県
 カ 河西 健二 1994 「新習字まとめ 3 中世から近世の植物」「梅原胡麻堂遺跡発掘調査報告(遺構編)」財团法人富山県文化振興財团
 キ 岸本 雄敏 1983 「富山県における土器製陶の成立と展開」「北陸の考古学」石川考古学研究会
 1990 「富山県」「日本土器製陶研究」青木書店
 京谷準一郎 1996 「国吉小史」「国吉小史刊行委員会
 金山 栄裕 1985 「条理と村落の歴史地図学研究」大明堂
 1999 「古地図からみた古代日本」中公新書
 ク 久世 康津 1999 「京都地域における埋納(廢紙)遺構の集成」「研究紀要」第5号 財团法人京都都市埋蔵文化財研究所
 2001 「京都はどうして埋められたのか」「西田弘光・水野聖記論集 现江の考古と歴史」白鳥社
 ニ 古泉 弘 1985 「10. 狩野晶 B. キセル」「江ノ島・都立一橋高校遺跡」都立一橋高校内遺跡調査団
 小島 孝芳・守屋 隆夫 1989 「北陸における塗生糞」「北陸の古代手工業生産」北陸古代手工业生産研究会
 小杉町教育委員会 1991 「守屋尚志発掘調査報告」
 古代の土器研究会 1997 「古代の土器研究—律令的土器模式の西・東5 7世紀の土器—」
 近藤 真郎 1962 「笠置式土器製造の研究」「日本塗壺の研究」5巻 日本国塗壺研究会
 1984 「土器製造の研究」青木書店
 サ 斎藤 孝正 他 1981 「愛知県伊那郡山西町古墳群分布調査報告(II)」愛知県教育委員会
 1983 「豪古堂・尾北山・美濃原における灰釉陶器の変遷」「北古古跡調査・古墳群発掘調査報告書」多治見市教育委員会
 佐賀県立九州陶磁文化館 1987 「国内出土の肥前陶磁」
 坂本 美夫 1986 「4 古代中期に特徴的な土器群の経緯(2) 芝崎高台の群・群について」「神奈川考古」第21号 神奈川考古列入会
 佐野 元 2003 「県内遺跡調査報告Ⅳ 五箇郡篇」(財)湘南市埋蔵文化財センター
 寒川 加 1992 「地盤考古学・考古学が語る地盤の歴史」中公新書
 寒川 雄・越前 進・町田 貢一 2002 「富山平野の南端で検出された地盤の痕跡」「活断層・古地盤調査報告」第2号 地質調査総合研究所
 地質調査総合センター
 シ 斎宅 雄久 1999 「近世北陸道遺跡の調査から」「紀要『富山考古学研究』」第2号 財团法人富山県文化振興財团
 ス 杉 仁・長岡 輝 1976 「越中國射水郡加賀野郡加賀村田地図」「越中四射水郡加賀村田地図」「日本古面絵圖集或 上」西向虎之助著 東京宝出版
 シ 太宰府教育委員会 2000 「太宰府の文化財第49集 太宰府光明院跡—陶器群分類編—」
 川島 明人 1986 「古名韻・漆町通跡出土土器の編年(考察)3 9世紀後半から13世紀にかけての土器群の変遷」「漆町通跡I」石川県立埋蔵文化財センター
 たばこと寝の博物館 1988 「させる」
 ピ 東京大学史料編纂所 1995 「越中四射水郡加賀野郡田地図」「越中四射水郡加賀村田地図」「日本古面絵圖集影 上 東日本」東京大学出版会
 戸潤 幹夫 1983 「能登式製陶土器—形式分類とその変遷—」「北陸の考古学」石川考古学研究会
 富山県 1978 「地中通記」「富山県史 資料編IV 近世中付録」

- 富山県教育委員会 1989 「富山県歴史の進歩報告書－北陸版－」
- 1982 「小杉流通業者地内進歩群 第3・4次緊急免課課税実績」
- 1984 「小杉流通業者地内進歩群 第6次緊急免課課税実績」
- 富山大学人文科学部考古学研究室 1989 「越中上木原」
- 1991 「能登北・砺道製塩遺跡群」
- ナ 内藤 政信 1944 「木村古坟考」要總社
- 中川 道子 1988 「五社流傳古代後期の土器群の福年にについて」『五社流傳免課調査報告』財團法人富山県文化振興財团
- 水井久美男 1994 「「後世の出土物」—出土陶器の調査と分類—」貢忠義所著遺跡調査会
- 2002 「新築」中世出土品の分類図版」高志青院
- 長岡 勘 1991 「越中国豊田盆地」「松引江園遺跡」花園遺跡研究会 東京堂出版
- 奈良国立文化財研究所 1984 「木器集成別巻 近畿古代編」
- 1990 「年輪に根を深む—日本における古文書学の成立—」
- 2003 「古代の陶瓶をめぐる経路図」
- 猪崎 彰一 1979 「猪四郎について」『ミニアジアム』5341 東京国際博物館
- 1982 「日本古代の陶瓶」『考古学論考』小林行進博士古着記念論文集刊行委員会
- ニ 西村 歩 1994 「物の複数技法—紙工房を中心として—」『文化財学論丛』奈良大学文化財学研究会刊行会
- ホ 桜井 明彦 2000 「須川窯の本憑道溝を解む」高岡市教育委員会
- 2004 「越中國射水原における越中寺跡遺跡について」『富山史蹟』第147号 越中史蹟会
- 2005 「越中寺跡遺跡の所在にあるかる考古学的考察」『富山史蹟』第148号 越中史蹟会
- ハ 横木 泰史 1986 「能登半島の土器製塩—系譜研究(1)」「石川考古学研究会会報 第20号」
- 1985 「古代能登屋に関する試論」『奈良 日本書紀』吉川弘文館
- 後木 渥夫・戸崎 幹夫 1990 「石川県【日本土器製塩研究】」青木書店
- 林 弘宗 1983 「山溪カタ—名鑑 日本の樹木」山と溪谷社
- ヒ 広島県東芦戸千野町漁業調査研究会・広島県考古学研究会 1984 「山県の弘術資料」
- フ 斎藤 良祐 他 1990 「東海地方における漁業生産の転換期について」『上器からみた中世社会の成立』シンポジウム実行委員会
- 1993 「應門市火 陶磁器第4」應門市史編纂委員会
- 1994 「山県焼窯跡の現状と課題」『三重県郷土文化財センター研究紀要3』三重県郷土文化財センター
- 2002 「瀬戸・美濃大蔵窯年の鉛検討」「研究紀要」第10号(財)瀬戸市郷土文化財センター
- 2005 「佐助南陽生産技術の伝播」「全国シガガラム 中世窯業の誇る生産技術の展開と革新」中央大学文学部日本史学研究会
- ホ 北陸古代土器研究会 1997 「シンボジウム 北陸の10・11世紀の上器相模」
- 北陸中世考古学研究会 1999 「第12回北陸中世考古学研究会資料集 中世北陸の石文化I」
- 祖父 真寛 2001 「佐渡江田跡出土の土器について」『紀要第4号 富山考古学研究』財團法人富山県文化振興財团
- マ 菊川 要 1991 「鐵投槍における武藏國生産品の特徴—新潟市古代土器出土遺物を中心にして—」『研究紀要Ⅲ』新潟市埋蔵文化資料館
- 1991 「北陸十代作陶器鉛物について」「北陸古代土器研究」創刊号 北陸古代土器研究会
- 松任市教育委員会・石川考古学研究会 1983 「高大の後膳江庄遺跡」
- ミ 水野 正好 1978 「はじめての考古学・事始」「手刊ざるのみん」18号】CCC出版局
- 1985 「出幅・除灰—その考古学—」『國立歴史民族博物館研究報告』第7集 国立歴史民族博物館
- 宮田 遼 1988 「越中瀬戸の窯業資料(1)」「大正第12号」富山考古学会
- 1994 「第2章 2・3章 技術と傳承」「瀬戸丹波焼」「梅原朝宗主窯跡発掘調査報告(瀬戸編)」財團法人富山県文化振興財团
- モ 宮月 晴弓 1990 「第4回 遺物 第3章 技術と傳承」「瀬戸丹波焼発掘調査報告書」石川県小松市教育委員会
- 2004 「北陸地域における飛鳥時代須磨郡の標柱—飛鳥一～垂露伊伊那の飛鳥郡の標柱について—」
- 森田 一勉 1978 「太宰府出土の輸入中國陶器について—型式分類と年輪を中心として—」「九州歴史資料館研究集」4
- 1982 「14～16世紀の白磁の型式分類と年輪」「貿易商品研究会20周年記念論文集」中日土器研究会
- ヤ 八幡 康 2001 「城状高台寺」「中世土器研究集—中世土器研究会20周年記念論文集—」中日土器研究会
- 安田 良典 1988 「越中高岡山百年の変遷」「高岡高岡発祥200年記念誌」越中高岡城発祥200年記念顕彰会実行委員会
- 山本 直人 1986 「石川県における古代中世の御腰袋の裏面」『石川考古学研究会』誌 第29号 石川考古学研究会
- 山本 信夫 2000 「太宰府の文化財第49集 太宰府朱塗舟形一陶器群分類編—」太宰府教育委員会
- 山本 真典 2005 「陳文時代後膳中世における葬送行為の一例」「葬式」 共同体研究会
- ヨ 青岡 康穂 1996 「中世須磨の研究」吉川弘文館
- 吉川 敏子 1996 「越中・越後中世土器の分布」「西川島」六水町教育委員会
- 四浦 寛喜 1987 1 「中世土器の分類」「西川島」六水町教育委員会
- 1997 「第6章第3節 北陸の中世漆器」「中・近世の北陸・考古学が語る社会史」北陸中世土器研究会
- 2006 「ものと人間の文化史2 塚」歴史学出版社
- ワ 和川 一郎 1959 「堺加野・堺加庄」「高岡市史 上巻」高岡市史編纂委員会

報告書抄録

ふりがな	いわほおかだじまいせき・たらのあかうらいせき・きんせいほくりくどういせきはっくつちょうきはうこく								
書名	岩坪岡田島遺跡・手洗野赤浦遺跡・近世北陸道遺跡発掘調査報告								
副書名	能越自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告								
巻次	VI								
シリーズ名	富山県文化振興財團埋蔵文化財発掘調査報告								
シリーズ番号	第35集								
編著者名	越前槙子、新宅 茂、町田賢一、光谷拓実、広岡公夫、寒川 旭								
編集機関	財團法人富山県文化振興財團 埋蔵文化財調査事務所								
所在地	〒930-0887 富山県富山市五福4384番1号 TEL 076-442-4229								
発行年月日	西暦2007年3月16日								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経 。	調査期間	測査面積 m ²	調査原因		
岩坪岡田島	高岡市 岩坪	16202	202235	36度 45分 52秒	19991018 ~ 20011130	4.646	道路(能越自動車道)建設に伴う事前調査		
手洗野赤浦	高岡市 手洗野	16202	202232	36度 45分 37秒	19990521 ~ 19991019	28.215			
近世北陸道	高岡市 能越	16202	202233	36度 43分 24秒	19980610 ~ 19980630	489			
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項				
岩坪岡田島	集落	绳文前期	流路	1条	縄文土器、石蹴、敲石、	鰐ヶ森式・朝日下層式 土器が出土			
			土器集中地点	9箇所	凹石、磨石				
			堅穴状遺構	1基	土師器、須恵器、黒色				
			自然流路	3条	土器、灰釉陶器、製塙				
			溝	9条	土器、土製品				
		孤立柱建物	2棟						
		橋	1箇所						
		土坑	19基						
		土器集中地点	1箇所						
手洗野赤浦	集落	中世	孤立柱建物	26棟	中世土器器、珠洲、越	12世紀中頃~14世紀の 集落跡 天正地震の地割れ			
			橋	4箇所	前、八尾、加賀、中国				
			道路	1条	製白磁、中国製青磁、				
			自然流路	8条	中国製青白磁、山茶碗、				
			溝	47条	古瀬戸、瀬戸美濃、土				
		井戸	24基	製品、木製品、石製品、					
		土坑	541基	金属製品					
		地割れ							
近世北陸道	交通	近世	溝	4条	越中瀬戸、唐津、伊万里、金屬製品	飛越地震の噴砂			
			噴砂						

要約

岩坪岡田島遺跡では、縄文時代前期後～末葉・7世紀・9世紀・12～14世紀を主体とする集落跡を検出した。縄文時代前葉では、自然河川の付近で前期後～末葉の鰐ヶ森式・朝日下層式土器が出土した。7世紀には溝が開削され、9世紀には孤立柱建物がみられるようになる。12世紀中頃には低地部の河川近くに村落が形成され、12世紀後半には台地上に道路が敷設され村落は台地上に移り、14世紀頃まで存続する。手洗野赤浦遺跡では、14～15世紀の集落跡を検出した。建物の区画溝と道路はほぼ東西・南北の方角に割っている。井戸から呪符木簡が出土し、建物周辺で土器が当時の地表面に並んだ状態で検出されるなど、祭祀の跡がみられる。また上記2遺跡では人規模な地震痕跡を検出した。近世北陸道遺跡では近世北陸道の側溝を検出した。

2007（平成19）年3月16日 白刷
2007（平成19）年3月16日 発行

富山県文化振興財团埋蔵文化財発掘調査報告第35集
**岩坪岡田島遺跡
手洗野赤浦遺跡 発掘調査報告
近世北陸道遺跡
－能越自動車道建設に伴う
埋蔵文化財発掘報告Ⅰ－
(第一分冊)**

編集・発行 財団法人富山県文化振興財团
埋蔵文化財調査事務所
〒930-0887 富山市五福4384番1号
TEL 076-442-4229

印 刷 中村印刷工業株式会社
〒930-0339 富山市東町2丁目3-22
TEL 076-424-4616